せせらぎ
190

せせらぎ　一九〇号　目次

プラトニック　神樂坂　……　2

もう一度あの空を飛ぶために　銀平糖　……　5

故人　幻想翡翠　……　9

みんなの「ふみか」特集　……　15

知らない星の、大好きな貴女たちへ　みみず　……　30

ある家族の物語　ラギ　……　35

受験姫のサンドリヨン　……　39

みんなの俳句　……　43

創作閑話　……　44

プラトニック

神樂坂

満開だった桜は散り、青色の絵の具とたくさんの水を混ぜたような空が広がる朝に、大きなあくびをして、いつも通りに田舎道にぽつんとあるバス停のベンチに腰を掛けた。学校行きのバスを待つ間に、バッグの外ポケットに入った英単語帳を取り出し小さな声で音読をする。まだ眠っている頭には、音読をしても受け入れられないようでペラペラとページを適当にめくり、それを閉じた。そんなことをしているうちに、左手首につけた腕時計をせわしなく見つめる、紺色のスーツを身にまとった人、気怠そうにスマホを眺める、2回ほど折ったスカートをはいた他校の女子高校生（JK）に、何かを思い出そうと、朝の空を眺める腰の曲がった白髪の老紳士、彼らがちょうど集まったところで緑色のラインが入ったバスが着いた。車内には独特のバスの香りが広がっていて、優しそうな運転手も週のはじめだからだろうか、心なしか少し顔が疲れているように見える。

目的地に着き、バスから降りた。そのころには、バスに乗ったときよりも日差しが強く、思わず目を細めた。5分程度歩き、学校の最寄り駅の踏切につかまっていたら後ろから、氷がほどけて転がるような、聞きなれた声がした。振り返ると、全力疾走で大きく手を振りこちらへ向かって来た小柄な少女が1人いた。

「何も、そんなに急いで来なくても……」そう苦笑する私に向かって、

「ううん、1秒でも多くユイと時間を共有したかったのっ。」と肩で息をしながら私を見上げニコッと笑ってそう応えた。その少女、ナギはいつも朝私を見かけると走って名前を呼んでくる。他愛もない話をしながら歩く。距離と時間が私たちに「学校」を連れてくる。1週間の始まりをことごとく感じさせる今日に少しの失望感と高揚感を覚えながら、「学校」を迎えた。

眠たい目をこすり、教室のドアを開く。自分の席に荷物を下ろし椅子に座ろうとした瞬間に後ろから「わぁっ！」と声を上げ私の肩を少し大きな手で敲いた。後ろに向くと、大きな目に上がった長いまつ毛で私の顔を覗き込んでいるサチがいた。

「おはよ、会ってない間にずいぶん日焼けしたね。」と私が言うと少し顔をしかめて、

「おはよう！　そうなんだよぉ……サッカーしてたらさ、けっこー焼けちゃってさ。」と悲しそうにサチが言った。話を聞いている限り、日焼け止めは徹底していたはずだけど初夏の日差しには負けてしまったらしい。

「まぁ、努力の証ってことでいいんじゃない？」とサチにそういうと、そのセリフを待っていたと言わんばかりの笑顔で大きくうなずいた。ややあって、サチがクラスメイトに呼ばれ、私の席を後にした。窓からやってきた風は熱気と湿気を含んで、暑さで疲弊した私たちの体から体力を奪っていく。まだ春の面影を残したこの季節はどんな顔をしても許されてしまうのがずるい。

進級して驚いたことがひとつ、同じ小学校に通っていたユイが同じクラスにいること。可愛らしい雰囲気と凛とした顔つきが魅力的で、ワタシはきっとそのときから一目惚れをしたのだと思う。だけど話しかける勇気は無く、半分諦めた気持ちで始業式の後にそそくさと帰ろうとしていたところで肩を軽く敲かれた。振り向けばさっきまで穴が開くほどワタシが見つめていたユイが目を見開いて、

「サチだよね……？　やっぱり！　元気してた？」とその容姿からは想像できないほどの早口でまくし立てた。私はその勢いと覚えていてくれた現実に驚いて声も出ずただ頷くことしかできなかった。

そしてふたつ、思い描いていた以上に現実はリアルであった。進級して、新たに気持ちを切り替えて奇跡（スペクタクル）の再会を果たしたユイとたくさん思い出を作ろう、そういう夢のある学校生活を送るはずだった。蓋を開ければ、課題、課題、課題、気づけばもう夏が顔を出している。少々落胆したところで、ワ

タシのキラキラ女子高生生活（JKライフ）を取り戻すために、課題と部活に追われる日々から誰もが恨むような鮮やかな日々に切り替えることにした、のは良かったのだが私だけが変化したところでユイはいつも忙しそうで話しかけるのがやっと。それでも何とかつかみ取った2人だけの休日をユイと話し合って少し遠くの海に出かけることにした。

扇風機が回る部屋で一人、終わらない課題を横目にスマホで友達の投稿をぼんやりと眺めていた。久しく会っていない中学の友人やクラスメイト、後輩の投稿、そんな中で私のスクロールする指をピタッと止めるものがあった。今わたしの中で一番仲の良いユイの投稿。わたしの知らないコと一緒に海へ出かけている写真。

「最近忙しいって言ってたじゃん……」なんてことない日常で干渉する必要ないのに、溜息とともに言葉がこぼれた。

感情に任せて終わらせた醜い字の課題と教科書たちが詰まった重たいリュックを背負い、くすんだローファーを履いて家を出た。いつもだったら1秒でも長く話したくて、感情と時間を共有したくて思いのままに走って、優しいユイに甘える。だけど今日はいつもの元気が出ない。普通に考えて、わたしが友達と遊んだだけで機嫌を悪くされて気を遣ってほしいなんて自分勝手なはなし。ユイに会いたいのに会いたくない、なんか何処その面倒くさい彼女みたいでさすがのわたしでも気持ち悪く感じた。

最近ナギに会っていない。以前よりも忙しくなくなったから久しぶりに私から遊びに誘おうと思い少し離れた教室へ足を進め賑やかな教室を覗いたら、優しい日差しに包まれながら真剣な面持ちで机に向かうナギの姿があった。ナギのクラスメイトから誰か呼びますかと聞かれたけれど話しかけにくい雰囲気に負けて、断ってしまった。そこまで急を要してなかったからまた今度、朝会ったときにでも話そうと思い長い廊下を歩いた。

気が付けば海に誘われてからここ1か月、ずっとサチと一緒にいる気がする。サチといるときは変に気を使うことがなくて気楽で過ごしやすくて、何で小学生のときにもっと仲良くしておかなかったんだろうってちょっぴり過去の自分を恨んだ。ゆっくりできる時間ができた私は誰かと遊びたいみたいで、サチを誘ってみるけど、最近は空がぐずっていてなかなか外に出る気は沸かないよね、なんて話していたら妙なことに私の家にサチが来ることになった。

本当はあんまり良くないことだってわかってる。だけど、どうしてもやめられなくてユイと遊ぶたびに自慢したくて親密そうな写真をメンション付きで投稿する。ユイは社交的で誰とでも仲が良い。だからこそ、ユイの1番になりたくて、1番って思わせたくて恨みを買うような投稿をする手が止まらない。こんなに仲良くなれたんだもん、約10年の片思いがやっと報われはじめたのに誰かに邪魔されるようなことがあったらイヤだから、誰よりもワタシが1番ユイのことを大好きだから。

最近、クラスメイトにユイとワタシの仲が良いという印象が付き始めたみたいで、都合がいい。何かペアで行わなければならないときに、ユイとワタシがきっとペアになるって思われ候補から除外してくれるようになるから、みんながワタシに気を遣ってユイに接してくれるから。

だんだん思い通りになってきて環境は良いはずなのにユイの気持ちだけは最近見えなくて、口にあてられていない糸電話をずっと耳に押し当ててるみたいでつまらない。ほんの少しでもココロの内を見せてくれたらいいのに、ずっと健気に待っているワタシがバカみたいじゃない。

いつからこうなっちゃったのかな、そんなことを思いながらわたしは今、ただわたしを守るために戦っている。

SNSを見ていたらまわってきたユイと女の子が仲良さそうにしている写真。それだけでモヤッとなんてしない。今までわたしが1番仲が良かったはずなのに、忙しいって言ってわたしの誘いは断るくせして他のコの誘い

は受けるんだね。しかもこの女の子、まえに海に行ってたコと一緒だよね。そのコが恨みを買おうとしていることは手に取るようにわかる、だけど落ち着けなくて思う壺にはまった。

放課後、わたしは足早にその女の子がいる教室へ向かった。そのコを呼び出して軽く話すつもりだったけれど思いの外頭に血が上っていたようで気づけばまわりが見えなくなっていて、ユイが唖然とした顔で立っていたことにさっき気が付いた。

ナギがサチを呼び出すところを目にした。そのときは別になにも思わなかったけど、よく考えたら面識のないふたりが接触することに違和感を覚え始めてふたりの姿を一心不乱に探した。

「わかってないのはそっちでしょう！？」そんな聞き覚えのある声が聞こえ、向かった。そこには顔を真っ赤にしたナギとサチがいた。

「なに？　ユイにかまってもらえないからって八つ当たりしないでよ！最近ユイと知り合ったヤツが何言ってんの！」

「なんでもっとユイのこと考えてあげないの！？　忙しいのにあんたのために時間作って、それなのにあんたはただ優越感に浸ってるだけでしょう！？　そもそもなんでユイの苦手な海に行ったの？　何も知らないからでしょう？　好き勝手にユイを承認欲求を満たすための道具として扱わないでよ！」

「忙しいはアンタから逃れるための言い訳じゃない？　最近暇だから遊ばないかってユイから言ったんだよ。そんなに嫉妬されても困るんだけどぉ……」

「ごめん……」いつもの大好きなふたりの姿が見られなくて俯いたまま震えた声で謝るしかできなかった。どんな表情をしているのか、どんなことを今思っているのか知りたくない。長くて痛い沈黙を1粒また1粒と雨が破る。気づけば雨音と私の呼吸音しか聞こえなくなり、重く冷たいブラウスは体温を奪ってゆく。ドラマみたいな演出はいらないのに。空は私の願いなど無視して泣き続けた。

もう一度あの空を飛ぶために

銀平糖

高二の夏。甲子園出場をかけた県予選の決勝。二十人のベンチ入りのメンバーのうち、高三が一八人、高二は颯馬と僕（翔也）の二人だけだ。三対二で迎えた九回裏の守り。このまま守り切れれば甲子園出場決定だ。気持ちの高揚があり、それでもボールに全集中して、持ち場のライトを守る。

相手チームがフライを打った。ライト側に来た。そのボールは思っていたよりも伸びて、下がって下がって下がって、跳んで、目一杯手を伸ばした。

ボールは僕のグローブの数センチ上を通った。

ガシャン、トン、コロコロ

フェンスに当たって、芝生に落ちた。僕は慌ててボールを拾って、仲間へと送球したが、そのボールがホームに行くよりほんのわずか先に、相手チームの二人目がホームインした。

逆転サヨナラ負け。

帰りのバスは地獄だった。そう感じたのは僕だけかもしれない。誰も僕を責めない。立派な先輩たちはそもそも、人を責めるようなことはしないのだ。先輩たちはたまらなく悔しくても、三年間全力でやり切ったという達成感もあるのだろう、悔しさのなかに満足感も感じられる。その中で僕だけはそんな気持ちになれない。なっていい資格がない。三年生は最後の試合であったのに、二年の僕が試合に出させてもらいながら……僕のせいで負けたんだ。もっと早く判断して、下がっていたら。僕がもっと走り込みをして、足が速かったら。僕があとほんの少し高く飛んでいたら。

家に帰って、シャワーも浴びずに部屋に閉じこもった。試合終了の瞬間、先輩たちの汗と涙でびしょぬれになった顔が頭に何度も何度も反芻される。

「――ァ」

気持ちが絶叫に表れた。

そのまま寝てしまったようで、目覚めたときには夜の九時だった。四時間近く眠っていたらしい。何もしていなかった自分がまた嫌になり、罪悪感が襲って、自分の体の泥と汗がまじったにおいと同じように、気持ちは暗い渦を巻いている。なんとか立ち上がり、風呂だけ入って、ベッドに倒れこむ。再び目覚めたときには朝になっていた。僕の暗い心とは反対に、空は快晴だった。鳥のチュンチュンという鳴き声がすがすがしく響いていて、苛立った。悲しくなった。それでも、学校はあるし、お腹は空く。食卓にあった巨大おにぎりを片手に自転車を漕いで、学校に向かう。

「おう、翔也。おはようって、どうした？　そんな暗い顔して」

親友の優斗に話しかけられて、ズキッとした。昨日の話なんて、誰にも言えないと思っていたが、優斗になら話せるかもしれない。

それでも、心配をかけないようにできるだけ明るく振る舞うことにした。

「聞いてくれよー、優斗。昨日、三年生最後の試合だったんだけどさ、俺、ボール取れなかったんだよね。マジ、俺のせいで負けたかも。めっちゃ申し訳ないし、悔しいし、へこんでるんだよね」

「そっかー。そりゃ辛いな。あんなにいつも練習頑張ってんのに、それでもミスするんだな。まあ、翔也が全力で頑張ったならいいんじゃないの？　三年生もいつも真面目に頑張ってる翔也のこと、責めたりしないでしょ」

「そ、そうだよな。ごめんごめん、暗い話して。あー、お腹空いた。早弁しよー」

優斗の言う通り、確かに三年生は責めないし、僕も全力で頑張ったつもりだ。でも、そんな励ましの言葉を聞いても、心のモヤモヤは晴れなかった。自分の心が罪悪感で埋め尽くされている。自分のやらかしたことは、どうすれば許されるのだろう？　おにぎりを食べた後で大してお腹が空いてないのに、お弁当を掻き込んで、弱音とともに飲み込んだ。

放課後、今日も部活はある。昨日で先輩たちは引退したから、今日からは二年と一年だけだ。前々から、次のキャプテンは颯馬、副キャプテンは僕、と決められていた。部活が始まる前に、みんなの前で挨拶をする。

「今日からキャプテンになります。俺は、先輩方からの伝統を引き継ぎながら――」

颯馬の完璧な、模範解答ともいえる挨拶の後にしゃべるのは嫌だ。

前に立つ。一気に部員の目線が変わった気がした。「なんで、こいつが副キャプテンになるんだ」「俺のほうが絶対うまいだろ」「もっと適任の先輩がいるでしょ」みんなの目線がそう、語っているように感じる。怖気づいた。しかし、事前に練習は何回かしていたので、暗記した挨拶が無意識に口から出ている。本当に逃げ出したかった。

今日のメニューはランニングから。二年が先頭になって、その後に一年が続く。

「ほいさー、いち、に、いち、に、おーえす

ほいさー、いち、に、いち、に、おーえす」

いつもは気にしたこともない周りの掛け声だが、今日は自分の声が小さいのだろうか、ほかの部員の低く重い掛け声が呪いのように自分を取り巻いているような気さえする。途中後ろを振り向いて「あと少しだ！がんばれー」と声掛けする颯馬は僕と正反対にまぶしい。

次にバッティング練習。カキン、カキンと颯馬は投げられたボールを打っていく。

「おー、颯馬いいぞー」

監督から声をかけられるのを見るだけでモヤモヤする。なんで、なんで、なんで…。この前まではあんなに楽しくてたまらなかった練習が、今日は、物理の授業より、何倍もつらかった。

週末、新チームになって初めての練習試合があった。相手は隣の商業高校。

五回裏。次は、颯馬の打席だ。

…。打つな…。打つな、打つな、打つな。

気づいたら、颯馬の失敗を心の中で願っている自分がいた。

カキン

むわっとした暑い空気を打ち消すように、颯馬が打った。一塁まで進んで、一アウト一塁三塁になった。次は僕の打席だ。

バッターボックスに立つ。

打たなきゃ、打たなきゃ、打たなきゃ、打たなきゃ、

焦るほどに手に汗がにじみ、頭が働かない。カーブか、ストレートか。ボールが投げられた。詰まった。僕が打ったボールはピッチャーの正面にいった。すぐにボールはホームに渡り、僕が着くよりも前に一塁にも渡った。

ベンチに戻るが、みんなの目線が痛い気がする。

「翔也先輩、お疲れ様です」

後輩が凍ったペットボトルを渡してくる。

「おう、ありがとう」

目線を上げると、後輩は笑顔だった。この状況でどうして、この笑顔を嘲笑と捉えないでいられようか。もう、帰りたい。

練習試合の結果は、颯馬のホームランの貢献もあり、三対二で勝利した。

月曜日。部活のことを思うと、頭が痛くなった。放課後になったら、もう、押しつぶされそうになって、「用事があるので、練習休みます」とだけ、ラインに上げて、そのまま家に帰った。さぼりだ。

火曜日、水曜日とそんな状況が続き、さぼったことに対する罪悪感が溜まれば溜まるほど、部活への足は重くなっていく。

木曜日の昼休み、普段は校庭で友達と遊ぶが、ここ最近はそんな気にもなれない。自分の席に座って、外を眺めながら、いろいろ考えてしまい、自己嫌悪に押しつぶされそうだ。
「――っ」
ダンッ
机に頭から沈む。
教室の後ろでボードゲームをしていた二人のクラスメートの会話が聞こえた。
「よっしゃー！　俺の勝ち」
「うーん」
「何考えてんだ？」
「ちょっとね、なんで今負けたのかなって。ここで、飛車を出していたら、こうなって、ああなって…」
「フーン。いろいろ考えてんだな。そういえば、お前って負けてもいつも、全然悔しそうじゃないよな」
「いや、悔しいよ。めっちゃ悔しい。でも、そうやって、あー負けた、って言って落ち込んでいても、何も進まないだろ」
「まあ。確かに」
「そうだろ？　失敗すること自体は悪いことじゃない。失敗は自分の足りないところ、つまり、次の目標を与えてくれるんだ。だから、負けること自体は失敗じゃない。それを次に生かさないのが一番の失敗だと、俺は思ってる。生きてる限り、二度とチャンスがないってことは大体ないしな」
「なんか、哲学者みたいだな」
「そーかー？」
「ガハハハッ」
…。普段は全然関わらないクラスメートの、ちょっとした言葉。でも、僕の中ではすごく、なんか、感じた。刺さった。

失敗が次の目標を与えてくれる。
僕は、夏の大会の失敗から、何か目標を立てたであろうか。ただ、感情に押しつぶされて、今、部活をさぼっているのが現状だ。次に生かせば、今からでも、失敗が失敗じゃなくなる？　大会の時、僕はジャンプ力が足りなかった。判断の速さも足りなかった。あとは…。
そう、考えていくと、何となく、気持ちが前向きに動いて、ぼんやりと目標が定まってきて、野球をしたい、って思いが湧いてきた。僕にはまだチャンスがある。もう一度、もう一度、あの空を飛びたい。

放課後、野球場へ向かう。
「あ、先輩久しぶりっす」
後輩は笑顔で言った。
「おう、悪かったな、休んじまって」
「そうですよー。翔也先輩にカーブ来たときの打ち方、教えてもらいたかったのに。今日の自主練時間か部活の後、教えてください！」
僕って、後輩に頼られていたんだ。自分が悪い想像をしていただけだった。この部活はこんなにも優しい場所だと思い出す。
久しぶりに体を動かした。三日しか、いや三日も野球をしていなかったので、少しずつ感覚を取り戻しながらバットを振る。ブン、ブンという空気を切る音が心地よい。みんなでランニングをする。声をかけ、一団になりながら走ること、それでやっと自分が野球部にいるんだ、と実感できた。
ああ、楽しい。
そうだ、僕は野球が好きなんだ。勝ち負けは大事だ。しかし、野球は勝ち負けが本質ではない。楽しさ、それこそが野球の、スポーツの本質だ。
翌朝の朝練。僕は練習が始まる三十分前に野球場に着いた。もちろん、一番早い。道具を準備し、ストレッチを始めると間もなく、颯馬が来た。颯馬は荷物を置いて、軽くストレッチをして、僕のほうに歩いてきた。

「翔也、キャッチボールしようぜ」
颯馬はそういうと距離をとって、構えた。ぼくは慌ててグローブをはめる。
パンッ
颯馬が投げたボールがまっすぐ僕のグローブに吸い込まれていった。心地よい音だ。
パンッ
パンッ
朝の澄んだ空気に僕たちのキャッチボールの音だけが響く。
パンッ
パンッ
「俺さ、お前のことすごいと思ってんだ」
「え」
パンッ
「いつも自主練して、それでちゃんと結果も残しているし。お前が夏の大会で捕ろうとしたボールだって、ほとんどの奴はホームランだって思ってたんだ」
パンッ
「だけどお前は飛んだ。結果的には取れなかったけど高く、高く飛んだお前は、めっちゃかっこよかった」
パンッ
「だから…そんな気にすることじゃねぇよ」
颯馬は帽子を深めに被り直して言った。
パンッ
パンッ
パンッ
高一のときから部内での一番を競っていたので、颯馬とは仲良く友達というよりも、ライバルという感じが強かった。そんな颯馬からの優しさに、びっくりするのと同時に嬉しくて嬉しくて、心の奥に熱いものをじんっと感じた。
パンッ
パンッ

「おはよう」
「おはよう――」
後輩たちの元気な声が聞こえる。ほかの部員たちも来たようだ。球場の時計を見上げると、練習開始の十五分前になっていた。僕たちはキャッチボールをやめ、他の部員のところに行って、朝練を始める。

それから、僕は今まで以上に野球の練習を頑張った。部活の練習のあとも学校に残って颯馬と練習をすることにした。僕たちがやり始めると、部長の颯馬の影響か、部全体が前よりも一層まとまって、練習を頑張る部員も増えたように思える。汗を流し、言葉を交わし、バットを振って――。
また、あの空を飛ぶために、「野球」をした。

秋、冬、春、夏。季節は変わり、甲子園の県予選を迎えた。
「よし、勝つぞ」
「ウォーー」
この空を飛ぶために、僕はグラウンドに足を踏み入れた。

故人

幻想翡翠

神様、どうしてですか。
どうして彼女が目の前にいるのですか。
彼女はこの世にいるわけがないんです。
彼女は5年前に死んだんです。
生きているはずがないんです。
彼女は、5年前の今日、私の目の前で死んだのですから。

私の通っていた高校は地方の私立の西洋宗教系の学校で、毎朝礼拝や、四月には復活祭、十二月には降誕祭がありました。部活の種類も豊富で、聖歌隊もありました。どこか古風なこの学校に彼女は、私が高校二年生の夏に親の都合で転校してきました。名前は夢野アスカ。可愛らしい名前だと思いました。彼女は端正な顔立ちと天真爛漫な性格の持ち主で、転校生だというのに、彼女の周りにはすぐに人だかりが出来ていました。一週間も経てば、彼女はクラスの中心人物でした。
私とは大違い。直感的にそう思いました。
私には、友達が居なかったから。
私の両親は共に教師で、この学校に長く勤めていました。
父は教頭を務めており、家庭よりも仕事を優先する人でした。母は厳格な人で現代にそぐわぬ指導法を敷いていたせいで生徒からの嫌われ者でした。
そして、私はそんな両親から産まれた子供だから、周りの子から厄介者扱いされていました。日々の不満のはけ口にされたのです。イジメ……ではないですが、それと近しいことをされていたのは事実です。昔はまだ友達の一人や二人はいたのですが、時間が経てば経つほど消滅しました。家に帰っても一人、学校に行っても一人。そんな人生に何の意味があるのだろう。どうして自分はのうのうと生きているのだろう。そんなどす黒い思いが心のうちの中でどんどん膨らみ続け、もうあとちょっとで大爆発する寸前でした。
その日、突然彼女が言ったのです。
「ウチら友達にならん！？」
始めは何かの冗談だと思いました。
だって、彼女はクラスの人気者ですよ？　同じクラスだとはいえ、ほぼ空気のような存在の私がそんな人から友達になってほしいと言われるなんて、そんな、夢のようなこと、あるはずがない。そう思ったからです。ですが、彼女は本気のようでした。黒曜石のようにまっすぐ輝いた瞳が、私を捉えて離さないのです。私が「いいよ」というまで、譲る気はなさそうでした。
気付けば、私は、
「わ、私なんかでよければ…」
と答えてしまっていたのでした。
「やったー！　じゃ、あしたからよろしくスミレっち！」
次の日から、私の一人ぼっちな生活は一転しました。
「あっ、おはヨ〜スミレっち！　今日マジ暑くね？」
「次の授業移動教室らしいよ〜ちょっちだりぃ…スミレっち一緒に行かん？」
「え〜スミレっちのお昼めっちゃ美味しそう！！　ねね、一緒に食べてもいい？」
「スミレっち今日も一緒に帰ろ〜！！」
来る日も来る日も、彼女は私と関わり続けました。クラスの嫌われ者の私といつも一緒にいるのですから、当然、彼女の周りに人は近づかなくなりました。それでも、彼女は私と関わり続けました。私には、何故彼女がここまで私にこだわるのか皆目見当もつきませんでした。新手の嫌がらせかとも思いました。
けれど、彼女が、彼女が私に見せる笑顔が、あまりにも眩しくて、暖かいから。

私の心は絆されてしまったのです。学校で友人と話すことも私からしたら久しぶりのことだったので、最初は遠慮しながら接していましたが、日が流れるごとに少しずつ対等に、友達として話せるようになりました。
「お、おはようございます…アスカ、さん…えっと、今日…本当に暑いですよ…ね、…」
「えっ、いいんですか…？　ありがとうございます…！」
「えへへ、これ、実は手作りなんです…！　結構、頑張っちゃいました…！　もちろんいいですよ！　一緒にお弁当、食べましょう！」
「ハイ！　アスカさん！」
友達と放課後にゲームセンターに行ったり、カラオケに行く。休日も会って一日中遊ぶ。どれも初めてのことでした。でも、全部とっても楽しかったです。特に二人で一緒に撮ったプリクラは、私にとって宝物です。彼女といると、いつも灰色だった空が青空のように見え、目に見える全てが綺麗に、鮮やかなものに見えました。彼女がいるならどんな壁も乗り越えられるような気がして、周りの目も、何もかも気にならなくなりました。
私とアスカさんは、生涯無二の友となりました。
この夢のような日々が続けばいいのに。本気でそう、思っていました。
覚めない夢がないように、幸せな日々は長くは続かないのです。
ある日の放課後、いつも通りアスカさんと遊んだあと家に帰ると両親の車が庭先に駐車してありました。両親が二人して揃うのは滅多にないことなので余程のことがあったのだろうと思い、一つ深呼吸をして家のドアを開けました。
「た、ただいま…」
『随分と遅かったじゃないか。スミレ』
「お父、さん…」
家には重苦しい空気が漂っていました。息が詰まりそうで、どうしようもないくらいに。
『今までどこをほっつき歩いていたんだ？』
父は、リビングの中央にある長机に両肘を立てながら堂々と座っていました。表情は暗く、目の中には私への非難の色が溢れてこぼれていました。ああ、これは怒られるやつだ。直感的に思いました。でも何で怒られるかまでは分かりませんでした。父の、気分を害すことなんて、していなかったはずだからです。
母はキッチンで夕飯の支度をしているようでした。ですが、黙り込んで何も言いません。こちらと目線が合わないのです。普段とは違う光景なのに何も言わない母は、とても不気味に見えました。
「それは、その、」
『そこに座りなさい』
「え、でも、まだ…」
『いいから座りなさい。お父さんは、お前に話があるんだ』
「…はい」
私は通学カバンをその場に置いて自分の席の椅子に座りました。すると、それまで何も言わなかった母が、父の隣の席に座り、今まで見たことがない目つきで私を見ました。瞳の奥にはどこまでも暗闇が広がり、吸い込まれそうなほどでした。
『単刀直入に言う。夢野アスカとの付き合いをやめなさい』
「えっ…な、なんで…」
「何で知ってるの…」
実は、私はアスカさんのことを二人に伝えていませんでした。自分が指導している生徒から毛嫌いされるほどの両親のことです、どうせアスカさんのことを上辺だけで判断して絶対にいい顔はしない。だから私は彼女との付き合いを徹底的に隠していたんです。なのに、どうして…
『親に隠し事が出来ると思っているのか？　もしそう思っているのなら、ツメが甘いな』
と同時に父はアスカさんと撮ったプリクラを懐から取り出しました。
「それは…アスカさんと撮った…なんで、なんでお父さんが持ってるの！」

いつも肌身離さず持っていたはず、なのに…
『これか？　ああ、これか。これはな、お前が外出しているときにお前の部屋から見つけたものだ。最近やたらと登校以外の外出が増えていると思ったら…こんなくだらないものを』
「返して…！」
『最近、お前の成績がみるみると下がっている。それは何故か。お前が夢野アスカと関わっているからだ。そうだろう？』
「ねぇ返してよ！！」
『いい加減にしろ！』
『だからお前はいつまで経っても馬鹿なんだ！』
『こんなもの！』

机の上に紙吹雪が舞い落ちました。どうやら父が、力いっぱいにプリクラを破ったようでした。
私はただ、ひらひらと舞うそれを眺めることしかできませんでした。ふと見やると、紙面上の彼女と目が合いました。こんな時でも、切れ端の彼女は笑っていて、私は、申し訳ない気持ちで身体中がいっぱいになって、
「どうして…どうして…」
気付けば、ボロボロになるまで泣いていました。
『父さんもな、こんなことをするのは辛いんだ』
「……」
『でもな、これも全てお前のためなんだ。あんな下品な生徒と付き合っていたら、ただでさえ頭の悪いお前が更に低能になる。俺はもう見ていられない…わかってくれるよな？』
「……」
『だいたいな、なぜあんな生徒がお前の友なんだ？　お前にはもっと相応しい友ができるはずだ。クラスメイトの生徒と仲良くできんのか？』
「……」

『なんとか言ったらどうなの！　親の話を無視するんじゃないわよ！』
それまでずっと黙り込んでいた母が急に立ち上がり、私の頬を平手打ちしました。鋭い痛みが顔全体に走り、打たれたところが素早く熱を持って、辺りの冷たい空気に触れました。
初めて、親にぶたれました。
「っ…」
『そもそも、アナタがあの不良生徒と絡むからいけないのよ！　だからお父さんがこんな辛い役目を負われているんじゃないの！』
『恥を知りなさいよ！』
『まあまあ、落ち着け。やり過ぎだ』
『でも！』
『もういいから！　…とにかく、あの生徒ともう関わるな。口も聞くんじゃあない。いいな？』
「…」
『…返事は？』
「…はい…」
これでこの日の会話は終わりました。少しは親に反抗できたら良かったのですが、気弱な私にはそんな勇気もなく、ただ親に従うしかありませんでした。自分の部屋に戻ったあとは、泣きながら、彼女の携帯番号を消しました。明日なんて来なければいいのに。久しぶりに思いました。
でも、それでも日は昇ります。来ない明日なんてものは、この世のどこを探したってないのです。受け入れるしかありません。

翌日、顔を洗おうと洗面台の前に立ちました。鏡に写っていたのは、涙の痕でびっしりなこの世の生き物とは思えない、醜い顔でした。
「(こんな顔、アスカさんに見せられないな…)」
ここまで思ってふと気付きました。彼女に見せる顔ももうない、とういう事実を。

重い足取りで登校すると、そこには驚くべき光景が広がっていました。アスカさんがまだ来ていないのです。彼女は見かけによらず早寝早起きを心がけている人で、私よりも遅く登校したことが今までで一度もありません。なのに、今日はいない。それに加えて、もう一つ変わったことがありました。

『あっ、スミレさん、おはようございます！』

『おお、綾瀬か、おはよう！』

急にアスカさん以外のクラスメイトが、私に自ら話しかけてきたのです。しかも、すり寄ってくるような猫撫で声で。

おそらく、父がその子たちの親に手を回したのでしょう。意地悪なまでに用意周到な父のことです。やらないわけがない。でも、もっと他のやり方はなかったのかと思いました。彼らの演技はとてもつもなく下手だからです。こちらに対する嫌悪感は隠せていないのに、声色と表情が変に柔らかくて、まるで友達の【ソレ】のようで気持ち悪い。見ていて吐き気がしました。

だと言うのに昼食にも、挙句の果てにはトイレにまでついてくるのです。私は、怒りを通り越して軽蔑の目で彼らを見ていました。

アスカさんが来る前まで、私のことを見向きもしなかったくせに。

私を故人のように扱っていたくせに。

アナタの笑顔なんていらない。偽善で固められた笑顔なんていらない。

私が見たいのは、アスカさんの笑顔だ。あの暖かい、陽だまりのような笑顔だ。

アスカさん。今はただ、貴女に会いたい。

話さなくてもいい。貴女の顔が見たい。

けれど、いくつ日を跨いでも、アスカさんは学校へ来ませんでした。彼女の机には、来なかった証のように、プリントが山積みになっていました。

普通に考えれば異常事態です。でも、クラスでは、アスカさんの話題はひとつも出てきませんでした。噂さえ波立ちませんでした。これも、両親のせいなのでしょう。アスカさんが来ないのも、きっと…。私の心は徐々に萎んでいって、何も感じなくなっていきました。日々の行動が「動作」そのものになっていて、まるで人の形をしたロボットのようでした。ロボットに感情はいらない。ただ与えられた仕事をこなすだけの、機械なのだから。

あのままいけば、私は本当にロボットになっていたでしょう。しかし、私の身には大きな転換が訪れたのです。

あれは、アスカさんが教室から忘れ去られかけていた日のことです。放課後に一人でとぼとぼと歩いていると、目線の先に古ぼけた公衆電話ボックスがありました。私は何を思ったのか、聞けるはずもないのに、無性に彼女の声が聞きたくなったのです。気付けば、足が勝手に電話ボックスに向かっていて、手には小綺麗な10円玉を握りしめていました。彼女の電話番号は、携帯からは消していましたが、忘れた日は一度もありませんでした。そっと深呼吸をして、彼女に電話を掛けました。よそから掛けて出るわけないと知りながらも何かの手違いで出てくれることを期待してしまったのです。

ワンコール、ツーコール。彼女は出ません。無機質なコール音が響き渡ります。

スリーコール、フォーコール。彼女は出ません。諦めたほうがいいでしょうか。

ファイブコール、シックスコール。それでも彼女はでません。もう、無理なのでしょうか。

そして、これで切ろうとしたセブンコール目。耳の奥でガチャリという音が聞こえました。

〈「…はい、夢野ですが」〉

〈「も、もしもし！　夢野さんですか！？」〉

〈「はあ…うちは確かに夢野ですけど…あの、アナタは？」〉

〈「私です！　スミレ！　綾瀬スミレです！」〉

〈「…！スミレっち！？」〉

〈「ハイ！　アスカさん！」〉

〈「……、あ～そっか！スミレっちか！　マジごめん気づかなくて！　てか、久しぶりじゃん！？　元気してる？」〉

〈「私は大丈夫です！　それよりも、アスカさんの方こそ、…元気ですか？」〉
〈「ウチは元気だけども…どした、スミレっち？　…泣いてんじゃん」〉
〈「…ごめんなさい、アスカさん…私の、私のせいで、アスカさんが…」〉
〈「…あ、ああ～あれね！　でもスミレっちのせいじゃないよ！　気にせんといて！」〉
〈「でも…」〉
〈「いいったらいいの！…それよりも、謝んなきゃいけないのはウチのほう。…ウチ、また転校するんだ」〉
〈「えっ…」〉
〈「ごめん。急だよね。本当は決まったときにすぐに連絡できたら良かったんだけど、いろいろごたついちゃって、さ」〉
〈「だから、学校にも来れなかったんですか？」〉
〈「まあ、そんな感じ」〉
〈「そう、だったんですか…あの、いつ転校するんですか？」〉
〈それがさ、もう明日、…なんだよね。だからさ、スミレっちとはもうこれが最後かなー…って」〉
〈「そんな…私は…貴女がいないと…」〉
〈「マジで急すぎる話だよね。…本当にごめん。ウチ、スミレっちと出会えて良かったよ。一緒に遊んだときもガチ超楽しかったしさ。…今まで、ありがとう」〉
〈「いやです…」〉
〈「えっ？　なんて？」〉
〈「嫌です！　これが最後になるなんて！　絶対に嫌です！！」〉
〈「スミレっち…」〉
〈「アスカさん、お願いです。今から会えませんか？私どうしてもあなたに会いたいんです！」〉
〈「…多分ちょっちくらいならいいけど、スミレっちは大丈夫なん？　親御さんになんか言われん？」〉
〈「両親なんてどうでもいいんです！　あんな、あんな化け物…」〉
〈「……わかった！　んじゃそっち行くわ！　ウチも、なんとか抜け出してみるよ！」〉
〈「本当ですか……！　ありがとうございます！」〉
アスカさんが通話を切ったのを確認してから、私も受話器を置いて電話ボックスを出ました。待ち合わせ場所は、私とアスカさんが友達になって何度も訪れたゲームセンターです。
ああ、会いたい。早く会いたい。一目見れるだけでいいから。貴女がいい。貴女じゃないと私は。
きっと、これ以上耐えられない。
日没の時間が早くなり始めた初秋の日、私は我をも忘れて、目的の場所に向かうために走りました。

走って、走って、走り続けて。しがらみなんて捨てて、今だけは自由に。
息が苦しくなって、足がいうことを聞かなくなって、ぼやける視界を振り切りながら前を見ました。
横断道路の向こう側に、アスカさんがいたのです。思わず私は
「アスカさーん！」
と言って手を振りました。アスカさんは、どうやらその声でこちらに気付いたようで
「スミレっちーーー！」
と笑顔で手を振り返してくれました。久しぶりに見たのに、その姿は最後に見たときとなんにも変わっていなくて、なんだか涙がでそうでした。
待っていてくださいね。すぐにそっちへ行きますから。
私は、彼女に会えた嬉しさのあまりか、周りをよく見ず駆け出してしまいました。

すぐ隣から聞こえるクラクションの音にも気付かずに。

「スミレっち危ない！」

ほんの一瞬のことでした。頭が真っ白になって、突き飛ばされた身体の痛みは感じませんでした。私は茫然としながら、目の前の現実を見ました。モノクロの海のなかに、滴る血の赤色が光るのを見ました。
私が愛したあの陽だまりは、どんどん温度を失って、冷たくなっていくばかりでした。

「アスカ、さん…？」

彼女はすぐに病院に運ばれましたが、即死でした。全て私のせいです。私が、無理を言って会いたいなんていったから。そのせいで彼女は死にました。世界中のどこを探したって、もう彼女は、いないのです。
彼女の葬式にも行きました。家族総出で行きましたが、顔も見たくないと言われました。当然と言えば当然です。けれどアスカさんのお父さんがお優しい方で、哀れだと思ったのか、私だけならいいと言ってくれました。
棺の中に横たわる彼女は、ただ寝ているだけのように、とても綺麗な顔をしていました。でも、顔が真っ青で、幽霊のようでした。
葬式が終わったあとに、アスカさんのご両親は、いろんなことを話してくれました。こんな私と仲良くしてくれたわけも、話してくれました。
それを聞いて、ますます辛くなりました。涙は最後まで枯れませんでした。

それで今に至ります。彼女は、夢野アスカは、5年前の今日、ここで死にました。だから、生きているはずはないのです。なのに、今確かに彼女がここにいます。姿形もあの頃となんら変わりなく、高校二年生のままです。

もしかして、本当にアスカさんなのでしょうか。いやそんなはずは…でも…悶々とうなっている間に、冷たい風が甲高い音を立てて辺り一面に吹き抜けました。その風の音が、

【スミレっち】

懐かしい響きを私の鼓膜まで運んだような気がしました。

アスカさん？　アスカさん！　貴女なんですね！　嬉しいです…！私、ずっと貴女にもう一度会いたかったんですよ…貴女に謝らなくちゃいけないことも、たくさん…えっ？　謝ることはないって？　…やっぱりアスカさんは優しい人ですね…ねえ、アスカさんせっかく再会したんですから一緒に遊びましょう！　そうですね…あのゲームセンターに行くのはどうですか？　ふふ、決まりですね！　ああ、神様！　この出会いに感謝します！

『ねえ、ママ？　あの人…』
『コラ！　よその人をジロジロと見るんじゃありません！』
『でも…』
『でもじゃありません！　ホラ、行きますよ！』
『でも、あの人電柱に向かって一人でおはなししてるよ？』

「折下ふみか」特集

令和七年七月に誕生した文芸部オリジナルキャラクター、「折下ふみか」。普段は太女ホームページのブログでしか見ることのできない彼女の世界を特集という形で集めました。

「いろんな世界のふみか」をテーマに、あったかもしれないふみかの話を読むことができますよ。

少しのぞいていってはどうでしょう。

8%はホントの話

阿野二枡

＊題名の8%の真実は、合唱祭三日前に負傷した伴奏者がどこぞのクラスにいたことで、あとは捏造だったりそうでもなかったりする。8という数字にもこれといった意味はない。折下がそのクラスにいたら、というもしものお話。＊

「行けー！　シュートだ！」
「がんばれー」
だだだっ、ぽんっ。
「あっ、惜しい！」
「あぶなーーーい！」
「え？」
――ドゴッ。嫌な音がした。

体育の授業で、バスケットボールの最中だった。私のチームは一通り負けて体育館の隅のほうで見学していたが、その瞬間は、時が止まったようだった。

慌てて立ち上がり、近寄ると、親友が肩を竦め、右手を左手で庇うように胸の前で握りこんで床にしゃがんでいた。去年の私の誕生日を誰よりも早く祝ってくれた、私の一番大切な部活仲間である。

「大丈夫？」と先生が問う。

「だいじょうばないです……」と呻くように親友――便宜上Aと呼んでおこう――が答える。それから先生に促されて、Aは体育館から姿を消した。保健室に向かうのだ。

二クラス混合の授業で、皆口々に同情や心配の声を掛けていたが、同じ組の人たちの間では動揺が広がっているのが見て取れた。何せAは三日後の合唱コンクールで伴奏するのだ。もし回復しなかったら、と案じるのも無理はない。

Aはこの事故の翌日に欠席し、本番前日に姿を現した。右手の中指には包帯が巻いてあった。

「直前に迷惑をかけてしまってごめんなさい。明日は鎮痛剤で誤魔化せば出られるから大丈夫。じゃあ、今日の練習を始めましょう！　昨日はどんな感じだったの」

机の横のフックに鞄を掛ける動作にすら痛みで顔をしかめていたのに、次の瞬間には彼女は真剣な光を瞳に宿していた。しばらく前に録音したピアノを流しながら歌わせ、終わると講評を一言二言、それから次への指示を飛ばす。ずっと右手を握ったり開いたり、包帯の上から指をさすったりしていたことを除けば、まったく普段通りだった。「指がドクドクしてうるさい、

せっかくの皆の歌が聞こえない」とこぼした割に、相変わらず良い耳をしている。

思えばAの心に一番寄り添えるものは音楽だったに違いない。部活で隣同士のコンピュータを使いながら小説を書いていると、「今はノッてるかも」と言いながら若干嬉しそうに書き進めているときがある。その一番調子のいいときの彼女ですら、合唱練習をしているときほど生き生きとしてはいなかった。

一週間余りでピアノの音取りを終え、歌に関しては三十二分音符ぶんのずれをも聞き逃さず、「伴奏が華に欠けるかも」と金曜日に提案されれば週明けにはアレンジを加えた録音を持ってくる。流行の音楽には疎いのに、ピアノが絡むと人が変わったように夢中になってしまうのだ、Aは。何しろこのときも、「ボールは手じゃなくて顔で受ければよかったんだろうけど、ビビっちゃった」とあっけらかんと言う始末だったのだから。

無情にも時間は経ち、私はさらに次の日、会場のホールの入り口でAと二十時間ぶりに再会した。

「指はどうなの？　弾けそう？」

どうしても訊かずにはいられなかった。

「今朝十回目の質問をどうも、答えはイエスよ」

私を安心させるためにふざけた口調で答えたのだろうと思って、つい笑みがこぼれた。

本番一時間前の休憩時間に、私たちは最後の練習をした。昼休みには手拍子と口パクで付き合ってくれたAは、「ごめん、今鎮痛剤を入れないと。もう指が限界」と言い、出て行った。それでも笑顔は崩していなかった。

十五分後、ベルが鳴る直前にAは席に戻ってきた。すぐさま膝に楽譜を広げ、ボールペンで何やら書き込みをし、クリアファイルに楽譜を戻してハンカチを取り出す。隣の席だったから、どうしても心配で様子を窺わずにはいられなかった。準備が終わるとしきりに指を曲げ伸ばしして、「ここはそのままの指遣いで」などと呟いていた。

いよいよ私たちの番が来た。舞台袖でのAは何度も私たちに口パクで「大丈夫」「行ける」と伝え、心底楽しみでたまらないと言わんばかりの笑みを浮かべていた。私は比較的ピアノから遠い立ち位置だったため、入場してからは彼女の顔を見ることはできなかったが。

結果は、金賞だった。金賞と聞いて落ち込むクラスは初めてで、ただ私も最優秀賞を取る気でいたから、皆の悔しい気持ちは痛いほど分かっていた。これまでのどの練習よりも、表現もタイミングも完璧な歌だったのに。怪我をしたなんて聞かされていなければ少しも分からないような伴奏だったのに。指揮だって、いや、誰もが一生懸命だったのに。Aは最優秀賞を取ったら泣くだろうからと出していたハンカチを仕舞い、「そっかぁ」と苦笑し、表彰台に歩いて行った。トロフィーを受け取った彼女は微笑みながら観客席に向かって一礼し、拍手が起こった。数秒して上げられた顔に浮かぶ表情は晴れ晴れとしていた。

合唱コンクールでは、最優秀賞のクラスがアンコールをすることになっている。そこに立ちたくなかったと言えば嘘になるが、その曲は好きだったし、私は比較的凪いだ気持ちで聞き入っていた。

と、横で頭ががくんと下がった気配がした。思わずそちらを向くと、俯いたAがハンカチを両眼に押し当てていた。さらに頭が下がって、Aの膝に乗っていたトロフィーもずり落ちる。私は壊してしまったらいけない、と、慌てて片手を差し出してそれに添えた。客席の薄暗い照明でも見えるくらい手垢のたくさん付いた、代々受け継がれてきた金賞のトロフィー。鈍く光るそれは、半分はAの膝で支えられているはずなのに、ひどく重かった。

エア積読

あきつさ

何回なんかい繰り返しても、こればっかりはドキドキと胸の高まりが収まることがない。買ったばかりの本が入った紙袋を胸元で抱きしめて、スキップしそうな足取りをなんとか抑えて家に帰る通学路を歩く。

通学路にある本屋に寄ってから帰るのが高校生になってからの私の日課だ。毎日学校帰りに本屋で、面白そうな本を購入する。毎月のお小遣いのほとんどは書籍に注ぎ込まれていた。

「ただいま〜！」

「おかえり」

わくわくのまま玄関を開けると珍しく返事が返ってきた。今日は母の方が早く帰ってきていたらしい。靴を脱ぐのももどかしくて乱暴に脱ぎ捨てると、リビングのガラスドアを開けて飛び込んだ。

荷物も早々に机の横に放りだして椅子に座ると、ぺりぺり、と紙袋の口を閉じているセロテープを剥がす。

「ふみか、また本を買ったの？」

リビングで大量の紙を広げていた母が呆れたような声で言った。確かにこの本は今月で四冊目だ。他の三冊のうち、まだ二冊は読み終わっていないし、買うだけ買ってまだ読んでいない本も中学校時代から部屋に積みっぱなしだし。

「新しく本を買うのなら読み終わってからって、いつも言っているのに」

仕事の書類をめくりながら言う母の言葉に、そっと視線をそらす。そんなことを言われたって、欲しい本がこの世から尽きないのだから仕方がない。

「本は見たときに買わないと、絶版になるなんてありふれてるんだから」

『本は逃げないんだから落ち着きなさい』とかよく言われるけれど、本は逃げるのだ。出版不況の昨今、買わなければ本はあっという間に非売品になってしまう。

そんな言い訳を込めて小さく呟いたが、母はまったく意にも介さないようで、はいはい、と軽く流す。

「あれ、その本もう持ってなかった？」

紙袋から本を取り出した私の手元を見て、母が言う。少し薄めの古い小説。持ち上げて表紙を眺めても、特に見覚えはない。

「そんなことないよ」

「ええ？　二年前かもう少し前くらいにそのタイトル家で見た気がするんだけど」

「嘘だぁ、これ読んだことないもん」

母があまりにも不思議がるから、証明してみようじゃないか、と本を持って部屋に向かう。母も気になっているようで後ろからついてきて、一緒に部屋に入った。

本棚いっぱいに詰め込まれた本としまいきれなくて本棚の周りや上に積まれた小説に、私の部屋の三分の一近くが圧迫されている。部屋が本でいっぱいというより、図書室に住んでいるとでも言ったほうがしっくりくるくらいだ。棚に入っている本はほとんど読み終わったものだから、周りの積読のタイトルを一冊ずつ確認する。

「うわ、また増えてる」

小さく呟いた母の言葉は聞こえないふりをして、目の前の本を一生懸命眺めた。

「あ、これじゃない？」

母が見つけたようで、積読の山の三合目くらいから一冊の小説を抜き取ろうとしているが、山頂あたりはぐらぐらと不穏な揺れ方をする。

あ、これ崩れるな、とどこか他人事みたいな感想が心に浮かんだ。

ドサドサッ、と重たい音を立てて山が崩れる。土砂崩れの如く。

意外と華麗に本の土砂崩れを避けた母は、呆れて頭が痛いといった様子でこちらを見ながら一冊の本を差し出した。

「ほら、これ。表紙違うけど、中身は同じじゃない？」

母が私に手渡した小説は、出版社が違うからか表紙は異なるが、まったく同じタイトルが刻まれていた。
「あれ、本当だ。読んだことないから忘れた」
「だから買った本はすぐに読めって言ってるのに……」
母は落ちた本をかき集めてまた積読の山脈を本棚の上に形成すると、リビングへ戻って行く。部屋に残された私は同じタイトル、同じ内容の本を二冊、右手と左手に持って立ち尽くしつづけた。

「あれ、ふみかがスマホ見てるなんて、珍しいね」
次の日の夜。食卓で食事のあとスマホを使っていた私に母が言った。確かにいつもは紙の本ばかり読んでいてスマホの使用頻度は低い。
私は昨日の一件で反省したのだ。積読を積みすぎるのはよくない。
「積読を消化しないとまずいと思って。とりあえずまだ買ってない小説を青空文庫で読んでる」
「……買ってない積読？」
母が奇っ怪なものに直面したような声で繰り返したので、スマホの画面から視線を上げた。
「そう。青空で読んじゃえば家に本は増えないし……」
「……エア積読？」
同じ家に住んでいても、血がつながっていても、母と私ではどうにも読書についてわかりあえないようだ。

折下ふみかの寄り道　　みみず

あー、あー。聞こえてますか？というか、見えていますか？　が正しいですかね。はじめましての方ははじめまして！　私は折下ふみか。自分で言うのもなんですが、文芸少女です！

私という存在は、二〇二四年七月九日に誕生しました。いや、誕生したのはもっと前？……とにかく、太田女子高校のブログに私が現れたのはその日です。あ、何をしに来たか気になります？　いやぁどうでしょう。それはあなたが今からこの文章を目で追えば分かるであろうことでしょうか。書かれていなければ永遠に分かりませんが。……なーんて、勿体ぶらずにちゃあんと話します！　強者ポジ、っていうんですかね？　こういう口調にあこがれちゃって。あ、またこんな雑談を挟んでしまいましたね。

ええっと、私が今日この場を借りて皆さんに会いに来たのは、単純な話……寂しかったからです。この学校には沢山の生徒がいるし、この学校に入りたいと思いブログを開く人もいる。なのに、私という存在の認知度はおそらく……ひじょーーーに低い！　どうなっているのでしょうか……。私の華麗なる冒険を見たくないのでしょうか……！？　いや、そもそもブログを開くこと自体があまり無いのでしょうか……無関心は一番厄介なものです。何事も。
例えば、そう、推し活にでも例えましょう。あなたが無関心だからとスルーしてきたアニメに、実は自分にドストライクなキャラクターがいたら？人生において最も刺さると言っても過言ではない、それくらい素晴らしいキャラクターのことを見逃しているやも……そんな風に、無関心は時に自分に不利益を起こします。「知らぬが仏」という言葉通り、知らない方が良い事があるように、「逆に知っていれば良かったのに」ってこと、無い訳が無いんですよね。確かに、リスキーなものであれば、慎重に調べるべきであるし、見ないまま生きることだってありでしょう。ですが、ブログを見ることに何のリスクがあるんでしょう。この部誌を見てくれている時点で、読書に対して多少は興味や意欲があるのだから、たまには部誌や紙媒体だけでなく、太田女子高校のブログにも顔を出していただきたいのです！　これは我儘でしょうか……？

えっ？　「どんなことをブログに載せているのか」って？　うーん、そうですね……基本的には何を書いてもＯＫなので、好きなものの話題とか、最近感じたこと・発見したこととか……何か文芸部内でイベントがあれば、それも載せているんですよ！　載る文章、口調とか表現とか、毎回全然違うんですよ。面白いでしょう？　それも楽しんでいただけたらいいなぁ、なんて。

そうだ！　沢山読んでもらって、皆さんそれぞれの「折下ふみか」を妄想してみてはいかがでしょう？　特に解釈不一致的な……「私はこんな子じゃない！」なんてことは起こりませんので、ご安心を。文に起こして、名を名乗れば、それはまごうことなく「折下ふみか」です。だって姿は見えないのだから。例え別人だとしても一切顔は見えないのですから。「折下ふみか」の冒険は、そうやって幾重にも折り重なって、混ざりあって、時に反発して……そんなものですよ。そうでないとしても、私はそれを受け入れたのですから、そういうものなのです。

きっと私も、その「折下ふみか」の一人なのでしょうし。

折下ふみかの年明け

銀平糖

「三、二、一、あけおめー！」

本葉（もとは）と年越しをした。いつもは家族で年越し、というか十二時前に寝てしまい、起きた状態で年越しはしたことないのだが、今年は違った。本葉に、年越しに家で一人で寂しいから家に泊ってほしいといわれ、今年は本葉の家で年越しだ。本葉のお父さんは出張でおらず、看護師のお母さんは夜勤らしい。

「いやあ、ついに２０２６、わくわくするねえ」

本葉が手をソワソワさせながら言った。

「なんか実感できないな。令和八年だよ？　この前、菅さんが『令和であります』てやったと思ったのに」

「さすがにそれは前すぎでしょ。ふみかの中で時間が八年間も止まってるじゃん」

「さすがに『この前』は言い過ぎたかも」

そうだよね、と本葉は相槌を打ちながらガサゴソと置いてあったスーパーの袋のなかを漁りだした。

「ジャーン。年明けたし、年明けうどん食べよう」

本葉はど〇兵衛のうどんを取り出した。

「え、さっき年越しそばで緑の〇ぬき食べたばっかりじゃん。ていうか、いつの間に買ってたの」

緑の〇ぬきは夕方に本葉と近くのスーパーで買ってきた。そのとき確かに緑のカップ麺が四つカゴに入っているな、とは思っていたものの、お母さんとお父さんの分の年越しそばかと思っていた。まさか、うどんだったとは。緑の〇ぬきを一緒に買っていたから、うどんは赤色だと思いきっていた。そうだ、世の中には緑のうどんもあるんだった。

「年明けうどんってそもそも存在するの？　うちじゃ食べないけど」

「年明けうどん」が不思議だったので私は本葉に尋ねた。

「え、ふみかの家だと食べないの？」

「うちはお正月はお雑煮だよ。逆に本葉の家はお雑煮食べないってこと？」

「何言ってるの。お雑煮食べないお正月があるわけないじゃん。どっちも食べるんだよ」

はい、と本葉が私の分のど〇兵衛のうどんを渡した。少しためらう。七時頃そばを食べて、それから約五時間。いつもだったら、体に気を使って真夜中にカップ麺なんて食べないけど、お正月だし、いいやと思う。

「ありがと」

湯沸かしポットからお湯をそそぐと、出汁の香りがふわっときて、そしてメガネが白く曇った。カップ麺を待つ五分ほど長く感じる五分ってないよな、と思いながら五分待ち、押さえてたる。

「いただきます」

ズゾゾ
本葉は美味しそうに麺をすすった。負けじと私もすすろうと思うが、猫舌であるのでどうしても時間がかかる。
ズゾゾ

「はー、食べた、食べた。ふみかこれからどうする？」
「本葉さすがに寝ようよ」
「何言ってるのふみか。まだ夜は始まったばかりだよ。そうだ。初詣行こうよ。初詣」
「嫌だ」
「行こうよ行こうよ」
「外寒いじゃん」
「行こうよ。大丈夫、二人なら寒くないよ」
「どういうとかわからないけど。仕方ない、行くか」
「やったー」
ハンガーに掛けてあるコートを着て、外に出る。キリっと冷たい空気が身を包んだ。はーっと息を吹くと当たり前だが真っ白だ。空を見上げると冬の澄んだ空に月が出ているかと疑うくらい星が輝いていて、まさに満天の星空だった。
本葉と二人で大光院に向かう。本葉の家から歩いて二十分ほどで到着した。
「わー結構人いるね」
本葉がはしゃぎながら言った。
「そうだね。あっちが参拝の列みたい。並ぼうか」
三十分くらい並んで、気分はディ〇ニーのアトラクション待ちだ。
順番が来て、はっと気づいた。
「あ、お財布忘れた。本葉お賽銭用のお金貸してくれない？　家に戻ったら返すから」
コートを着ただけで満足して、スマホ以外何も持たずに来てしまった。

「いいよ。はい」
ジャラジャラ
そういうと本葉はカバンから財布ではなく、五円玉が大量に入ったジップロックを取り出した。
「なにそれ」
「お賽銭用の五円玉だよ」
「すご。なんで五円玉なの？」
「ほら、五円玉でご縁がありますように、てことで。うちら女子高だから神様にでも頼らなきゃ一生彼氏できないよ」
「神様に頼っても彼氏は無理でしょ」
「そんなことない！」
パンパン
二拝二拍手一礼をする。
――。
「ふー。これで今年こそは彼氏作れるぞ」
本葉がこぶしを空に掲げた。
ふふっと思わず笑ってしまう。
「もー笑わないでよ。真面目なんだから。ふみかは何願ったの？」
「今年も本がたくさん読めますようにって。」
「ははっふみからしい」
「あと、」
「あと？」
「やっぱやめた」
「なんで。教えてよ」
「やっぱ何でもないの」
「こらふみか、かくすなー」
ハハハ
ちょっと意地悪かなとも思ったけどやっぱり言わない。私が「今年も本葉と

一緒に楽しく過ごせますように」て願ったと知ったら、本葉は絶対からかうだろうから。

折下ふみかの大冒険　　幻想翡翠

「ま、マジで！？」
ふみかは即座に仰向けの状態からガバっと起き上がり、スマートフォンを凝視した。長方形の液晶には、彼女が待ち望んでいた情報が映っていた。
【稀代の作家　右京零　待望の新作！『黎明のファウスト』明日発売！】
ふみかが最近ハマっている作家「右京零」の新作が発売されるというのだ。しかも明日。なんという運命の偶然であろうか。今日は金曜日である。
※右京零とは…日本のミステリー小説家。代表作に『薄暮のアウトサイダー』『沈黙のカタルシス』などがある。
推し作家の本ならば、絶対に買ったその日のうちに手に入れたい。しかし、ふみかにはある懸念があった。
それは、「近場の本屋に右京零の本がない」ということである。
説明しよう！　ふみかが住んでいる地域にはわずか数店舗しか書店がなく、その上品揃えも少ないため人気作家の本は遅れて入荷するのである！
右京零は今流行りの有名小説家であるため、彼の本はふみかの家の近くにある書店にほとんどない。ましてや、新作ならばなおさらである。
「うーん…どうしよ…いや、でもな…」
「ああー…よし、決めた！　買いに行こう！」
どうしても新作を手に入れたい。その思いは普段本以外のことではテコでも動かないふみかの心に行動心を宿らせた。
「待ってろ『黎明のファウスト』！　必ず手に入れてやるー！」
こうして折下ふみかの冒険は幕を開けた。
翌日、午前１０時過ぎ、ふみかの住んでいる場所から電車で約３０分の結構な都会の某駅前。
「やあっと着いた…」
ふみかはひとつため息をした。なにぶんここまで来るのにいろんなハプニングがあったからである。まず、買いに行こうと思い立ったところまではよかった。だが、その行動に親が乗り気になってくれなかったのである。ふみかは親に送迎してもらう気満々だったので、その旨を伝えた時の
「えーーー遠いよーーめんどくさーい」
という母の言葉には面を食らった。その後、母と何度も話し合いを重ね、結果として【電車で行くというのなら最寄り駅までの送迎なら可】という結論になった。ふみかはそれを受け入れ、電車に揺られてここまで来たのである。ふみかにとって、電車に一人で乗って遠くの場所にいくのはこれが初めてであるため、少し緊張気味になりながら駅のホームに降り立った。幸いにも来た電車内にはそれほど人は乗っておらず、ゆったりとした空気が広がっていた。おかげでふみかの緊張は緩み、無事開いていた座席にも座ることができた。が、ここでふみかに更なる不運が訪れる。
それは、満員電車である。
ふみかが目指している書店は、大都市の一歩手前のところにあった。そのため途中駅から大都市目当てで乗車してくる人がわんさかいたのである。最初はがらんとしていた車内ものの数分で都内のサラリーマンが毎朝見る光景になってしまったのだ。息をするのもやっとな車内環境は、ふみかの体力を大幅に削った。しかし、ここでへこたれるふみかではない。
（これも新作を手に入れるため…）

そう自分に言い聞かして、どうにか乗り切った。
そうして、現在にいたる。
「疲れたなあ…でもここから目当ての本屋まであとちょっとだし、気張っていきますか！」
ふみかが目指している本屋は、駅から約徒歩１５分くらいにある。先程のちょっとした困難を乗り越えたふみかにはもう怖いものはない。ならば早く本屋に向かい、本を手に入れ、のんびりとした午後を過ごそう。そうだそうしよう。
ふみかはまた新たな一歩を踏み出した。
しかし、時に運命というものは残酷なもので、ふみかにさらなる試練を与える。

「ねぇーもう最悪…」
運命がふみかに与えた新たな試練。それは、

悪天候である。
携帯のマップを頼りに慣れぬ道を歩いていたふみかであったが、突然頭上に何か冷たいものが降ってきたのを感じた。なんだこれは？　まさか鳥のフンか？　そう思っていると、今度はスマホの画面にそれが落ちた。拡大されたマップの上を透明な水滴がつう、と伝っていく。鳥のフンはこんなに透明なものじゃない。じゃあもしや、
「え？　雨降ってきた？」
そうである。先程まで青空を見せていた空はいつの間にやらうす暗い空に変わっており、突如として、ふみかのいる辺り一面に雨をふらせたのである。その雨が小雨であったことは不幸中の幸いであろうか。けれども、ふみかはへこたれない。こういった事態を予測して、持ち物の中に折りたたみ傘を忍ばせていたのである。本にとって水や湿気はは大敵だ。いそげ、ふみか！　傘をさせ！

言われるまでもなく、ふみかはすぐに折りたたみ傘を展開した。まあ、その折りたたみ傘が少々古く、傘布に小さい穴が開いていて少しずつ身体が濡れていくような代物であったがが、正味ないよりマシである。
「よし！　これでどうにかなるわ！」
水色の可愛らしい傘を携えながら、ふみかはまた歩き始めた。
雨が降り始めてから約五分、駅から歩き始めておよそ１０分後。
「いやもうなんで！？」
暴風、吹き荒れる。
理由は定かではないが、先程から急に風が吹き始めたのである。しかも、向かい風である。
なんという障壁！なんという苦難！
次々と襲い来る障害にふみかの心は揺さぶられていく。

「寒い…もう嫌だ…家に帰りたい…」
あきらめるなふみか！　書店はもうすぐだ！
がんばれふみか！　お前の目的はなんだ！

「いや、ダメだ…せっかくここまできたのに…」
「帰れるわけ…ない…」
「新作…絶対、手に、入れる…」
そうだふみかよ！　お前は新作を買いに此処まで来たのだ！
もう少しの辛抱だ！　行け！ふみかよ！

「風立ちぬ、いざ生きめやも…」

新作を追って、追い求め続けて、かれこれ駅から約３０分後。ついに、ついにふみかは。
「つ、着いた…！　着いたーー！！」
無事に本屋にたどり着いたのであった。
すぐさま中に入って目当ての本の有無を確認する。「黎明のファウスト」は、入口の目の前に大量に山積みしてあった。
ここまで苦労したかいがあったというものだ。
ふみかは思わず涙ぐんだ。

　その後のふみかの行動はとても素早いものだった。
一度「黎明のファウスト」を手に取ったかと思うと、他のものには目もくれずレジへ直行。会計を済ませたかと思ったら今度は近くのカフェへ直行し軽い昼休憩を済ませたあと真っ先に駅へと戻り親に帰る旨の連絡をし、今は午後一の電車に乗っていた。
ちなみに、天気はあまり変わっていないが、本は無事である。
もう自分がすべき目的を果たしたふみかは家に帰りたかった。とにかく帰りたかったのである。
基本的にインドア派であるふみかにとって家はパラダイスだ。一刻も早く愛しの我が家に帰って、ゆったりと本を読みたかったのだ。
いろんなことが連続して正直疲れた。疲れたが、こうして振り返ってみると案外悪くない。
そう思ったふみかであった。

　ふみかの家の最寄り駅前。
迎えに来た母が言った。
「ふみか、なんか随分と疲れてるわね。どったの？」
「いや…ちょっと大冒険したんだよ」

いつかの約束

ラギ

私―折下ふみかは、「太田女子高校文芸部」である。
正確に言えば、文芸部の一部である。
説明が難しいが、いずれにしろ、私は人間ではなく、「文芸部の象徴」みたいな存在である。
実体はないし、姿を見せることはできても、年度をまたいで私のことを覚えていられるのは文芸部のみんなだけ。
文芸部のみんなの「認識」が私を私にしているため、生まれてしばらくは力が安定せず、なかなか学校より外に出ることができなかったのだが。
これは、それから一年か二年が経ったころ。

ようやく学校の外に出られるようになって、私は学校の周りを探検していた。
そのうち、もっと外まで行けるようになると、私は大光院と金山に行ってみることにした。
文芸部のみんなが、春の新歓ハイキングで毎年行っていて、私も行きたいと思っていたのだが、まだ学校の外に出られずに泣く泣く留守番したのだ。
行動範囲が広がり、今なら行ける、と思った私は、早速行動に移した。
とある日、一人で金山に登ったのだ。

「はぁ、はぁ…やっと頂上…」
ぐったりしながら、私はようやく金山山頂にたどり着いた。
体力の概念なんてないはずなのに、どっと疲れが押し寄せてくるようにすら感じる。
「はぁー…」
大きく一つ、ため息をついて、持ってきたペットボトルのお茶を飲もうとし

たとき。
「おい、人間。」
後ろから、声をかけられた。
「…。!?」
驚いて振り向けば、ずいぶんと古風な恰好をした少年が立っていた。
いや、古風というよりは、なんというか、古すぎるというか…。
和服をきっちりと着て、髪もきれいに整えられていて、手には…
「刀…?」
思わずつぶやいた。っていうか、今この子私のこと「人間」って呼んだ?
混乱していると、少年は「おれのことが見えるんだな!?」と私に詰め寄ってきた。
と思えば、今度は「人間にしてはなんだか妙な気配だが…」と怪訝そうな顔になった。
一体なんだというのか?

様子のおかしかった少年を落ち着かせて話を聞くと、少年は金山城の化身らしい。(私や彼のように、本来形をもたないものが形をとっているものを〝化身〟というらしい。)
少年の姿をしているのは、城が完全な姿ではないから、その分の力が欠けて姿に影響をおよぼしているからとのことだった。
「せっかくおれのことが見える人間が来たと思ったのに、おれと同じ化身だったとは…」
「なんで化身じゃだめなの?」
「化身はほとんどの人間の目に映らない。おれも、長いことここに来るたくさんの人間たちに話しかけてきたが、おれに気づいたものはいなかった。」
「なんで話しかけていたの?」
「…おれに関わってきた人間たちについて、今の人間たちに知ってもらいたいからだ。」
「金山城に関わった人たち? 城主たちってこと?」
「まぁな、城主だけじゃなく、おれを作った…金山城の築城に関わったものとか、歴史書にも残らないような人間たちのことも。」
「ふーん…」
「まぁ、いつか元の姿を取り戻したい、っていうのもあるけどな。」
「城が建て直されれば、元の姿を取り戻せるってこと?」
「そうだ。そのためにも、今よりももっとたくさんの人間に金山城のこと、金山城に関わった人間たちのことを知ってもらいたい。それで、おれのことが見える人間を探していたんだ。」
「なるほど。」
「しかし、化身だったとは…近くで時々見かける子どもたちと同じ服装をしていたから間違えたか、しばらく化身に会っていなかったからか…」
「『化身に会っていなかった』って? 金山の化身とかいないの?」
「金山の化身は長らく姿を見せていない。新田神社の化身も最近見ていないし、大光院の化身は敷地から出ていないようだしな。おれはそこまで遠くに行けないから、他の化身に会いに行くこともなかなかできないしな。」
「呑龍様にも化身っていたんだ…通ってきたけど気づかなかった…」
「…そういえば、お前の名前は?」
「たしかに、名乗ってなかったね。私は折下文香。ふみかって呼んで。太田女子高校文芸部の…化身、になるのかな。」
「太田女子高校? というと、麓のほうにある学校か。」
ふむ、と考え込む素振りをして、金山城の化身は言った。
「ふみか、お前の高校に、化身を見ることのできる者はいないか? その者に頼めばいいだろう!」
「いるかもしれないけど、見えるか見えないか、どうやって判別するの?
それに、あなたの願いが叶うまで、ずっとここまで通わせるつもり?」
「そ、れは…」

私の言葉に、金山城の化身はうっと言葉に詰まった。
「…確かにふみかの言う通りだ。それに、お前の高校の者でなく、ここを訪れた者に頼んだところで、それは変わりないな…」
金山城の化身はしょんもりと肩を落とした。
「…」
つい、私は口にした。
「私は？」
金山城の化身は驚いた顔をした。
「だって、お前は化身だろう。」
「そうだけど、あなたの希望は『化身が見える人間』なんでしょ？」
「ああ。だが…」
「さっき言ったけど、私は『太田女子高校文芸部』の化身。だからか、文芸部の子には見えるし、覚えててもらえるの。」
「それは…」
「私があなたから話を聞き取ってまとめて、それを文芸部の子たちに伝えるだけでも、あなたの願いに近づくんじゃない？…少しだけかもしれないけど。」
「ふみか…」
「…まぁ、本当に少しだけだろうし、あなたの願いに近づくかもわからないけど…」
「いや、頼む！」
「うわっ⁉」
いきなり飛びつかれて、びっくりした。
「少しでも、可能性があるなら。頼む。」
「…」
つい、言ってしまっただけだが、金山城の化身は本気にしたようだった。
それに…
「だめか…？」
はぁ、とため息をついて、私は言った。
「しょうがないなぁ…」
わかりやすく、金山城の化身の顔が輝いた。
「ありがとう、ふみか‼」
そう言って、彼は私に、手を差し出した。
「改めて、よろしく頼む。」
「よろしくね、金山城の化身さん。」
そうして、金山に通う日々が始まった。

「どうしよっかなぁ…」
ふとつぶやくと、隣から
「どうしたんだ？」
と声をかけられた。金山城の化身である。
「今までけっこう聞き取りを進めてきたけど、これをどんなふうにまとめようかなって。」
「どんなふうに、とは？」
「ただまとめて、年表とかにしただけじゃ、なかなか興味を持ってもらえないんじゃないかと思うの。史実をまとめているから資料としてはいいものになると思うけど、興味をもって、多くの人に見てもらえるかはまた別の話だろうから。」
「ふむ…？」
「人は面白さとか、ストーリーを求めるんじゃないか、ってこと。」
「作り話にする気か？」
「そうは言ってないから、怒らないで。」
「…」
「事実を並べただけでは、人にはただの資料として映るでしょう。資料としてまとめるのもいいだろうけど、人に読ませたい、知らせたいなら〝興味を持ってもらうこと〟が大事だと思う。興味を持ってもらうには、年表ではな

くて、ストーリーとして構成するのがいいとも思うよ。」
「しかしそれでは、作り話に…」
「作り話にする必要なんてないでしょう。」
「というと？」
「城や城に関わった人たちに、すでにストーリーは存在している、ってこと。作り話を交える必要などなく、ストーリーが完成している。」
「すまん、わからん…」
「年表はただ事実を並べたものだけど、〝人の視点〟に立って書けば、事実だけで人を惹きつけるには十分なストーリーを書けるはず。…年表じゃなくて、小説にしたらどうかなって。」
「なるほど。」
「小説なら、年表にはのりきらない人々のこともせられる。年表にするより、もっともっと面白くできると思うよ。…そうなると、書き手が必要なんだけどね。この膨大なデータをまとめて、一つの物語として構成してくれる、書き手が。難しいだろうけど。」
「お前は、色々なことを考えてくれたのだな。」
「そうかな。」
「ああ。ありがとう、ふみか。」
「どういたしまして。」

今日も金山へ行こうと、玄関へ向かっていると、声をかけられた。
「ふみかー。」
振り向けば、澪ちゃんがいた。
八朔日澪ちゃん。
文芸部の部員の一人で、私の大事な友達。
「どうしたの？」
「一緒に図書室行かん？　って思ったんだけど、なんか用事あるの？　最近、よくどこか行ってるよね。」
「用事っていうか…」
私は澪ちゃんに、金山であったことを話した。
「歴史小説にする、ってこと？」
「まぁそうだね。内容を考えても、ジャンルは歴史小説になるのかなー。」
「書く人を探してるのかー…」
「そうらしい。小説じゃなくてもいいけど、何らかの形で金山と金山城が辿ってきた歴史というか、足跡というか…それを、書き記して、可能なら世に出してほしい、って。」
「書き記すほうはともかく、世に出すっていうのは、私たちじゃ難しいね。」
「そうだよね。それで、とりあえず書き記してほしい、ってほうだけでも叶えようと思って、聞き取りを進めていたところだったんだよね。」
「築城がいつだったか、正確にはわかっていなかったと思うけど、どちらにしろ長い歴史があることには変わりないよね。それだけの量を書き留めるのも、大変だね。」
「そうなんだよね。ほとんど毎日通ってるけど、なかなか終わらないどころか、ほんとに進んでる？って言いたくなるくらいだよ。」
「完成するのはいつになるのかね。」
「まったくだよ…かといって、あの時、私がやろうか、って言わなければよかったとは思ってないんだ。」
「そうなの？」
「うん。自分の知らないこと、それも歴史あるもののことを知るって、けっこう楽しいことなんだなって、思ったから。」
「なら、よかった。」
「けど、これだけの分量を一つの小説としてまとめるって、大変だよね…誰かに頼むか、自分で書くかしようと思っていたんだけど、私小説書いたことないし…文芸部なのに。」
「初めて書く小説のもとがこの分量って、大変どころじゃないんじゃな

い？」
「だよねぇ…どうしよう…」
私が唸っていると、ふと彼女が言った。
「私が書こうか？」
「…え？」
驚いて彼女の顔を見ると、彼女は目を逸らしながら言った。
「歴史小説なんて書いたことないし、専門外だけど…いつかでよければ、やってみるよ。」
「…いいの？　ってか、何で？」
「…私、歴史好きだし、金山とか、身近にあるものは特にそうだし。興味を持ったことに対しては、何でも知りたくなる人だから。ふみかが聞き取ったことを、一つ残らず知りたい。金山城そのものから聞いた話ってことは、推測や憶測の話ではなくて、本当にあった真実ってことだと思うからさ。」
「…知りたい、かぁ…」
私は彼女の目を見た。
「…いいの？」
「…いいよ。私も歴史小説書いたことないし、書けるかもわからないけど…いつか、完成させてみせるよ。本屋さんに並べて、ふみかに届くようにしてみせる。」
私はちょっと、あっけにとられてしまった。
彼女は、面倒なことに進んで首を突っ込むタイプではないし、ちょっとの間とか、長くて一年くらいの約束ならともかく、〝いつか〟なんて約束をするようなタイプでもない。
持ち掛けられても、実現できるかわからないから、と言って断るようなタイプだ。
「…約束だよ。」
だから、少し意地悪をしてしまったと思った。
けど、彼女は、
「うん。…約束。」
目を逸らしながら、小指を私に向かって差し出した。
あれから、本屋さんに通うのが日課になった。
毎日毎日、新刊の棚とか、隅々まで眺めて帰る。
そんな生活をしていた。
「ないかなぁ…」
今日もまた、約束を探して店を見て回る。
棚をぐるりと回って、見覚えのある名前と目が合った。
ふふっと笑みがこぼれた。
「見つけた。」
約束は、果たされた。

肉まん、ころりん　　神樂坂

カチカチと無機質な音を静かな部屋に響かせているそれは１８時を示している。大きな伸びをし、重たい荷物を持って玄関を目指して長い廊下をスマホのライトで照らしながら歩く。薄暗く照らされた玄関の重たいドアをグッと力強く押して、冷たくなったローファーに入れた右足を風が強く吹く守られていない世界へと放り出す。間もなく風はひとりで帰る私をあざ笑うかのように一層強く速く吹いて、進みたい方向へなかなか進ませてくれない。私は風ごときに馬鹿にされるのは何か気に食わないと思ったから全力で抗ってみるしかない、疲れた私はそう思い、寂しさを紛らわすために妙な行動に出た。
「私の足を止めようと全力だけど、そんなに私のこと好きなの？　今は私１人しかいないけど、普段の私は人気者なんだからそんなことして困らせたりしないでよねっ。」そんなことをぶつぶつ言っていたら風はヒュッと途

端に止んだ。なんだか悔しい。私は私の機嫌を直すために近くのコンビニに寄って心と小腹を満たしに行くことにした。わざわざ自分の機嫌を取るためだけに寄り道をするという手段に出られる私、今誰よりも輝いているはず。そんなテンションじゃないと生きていけないよな、現実は風にあおられて機嫌を損ねたぼっちであることには変わりないんだし。自動ドアが私を迎え入れてくれた店内は程よく暖かくて肩の力がフッと抜けて本来の首の長さをよみがえらせることができた。一目散に安くておいしいパンとにらめっこを始めようとレジ前を通る。ふと目をやったものがあまりにも罪で私はそれとほうじ茶を購入した。まるっこくて白くてふわふわしていて冬の私たちの覚め切った体が欲するような湯気を立たせている肉まん。ウキウキしながらコンビニから出て駅へと急ぐ。肉まんとほうじ茶をカイロ代わりにしてホームに着くまでは食べずに我慢しよう、そうしたほうがもっとおいしくなる気がする。さらに足を速めていたら、某昔話のおにぎりもびっくり。歩道に転がっていた大きめの何かに足をひっかけてしまい、肉まんと私は工事中の穴へ大きく跳ねてコロコロ転がっていった。

　目が覚めると目の前は色々なものが小さくてあからさまに何かがおかしい。そして何よりも、いくらまわりを見渡しても私が楽しみにしていた肉まんがない。盗難？　警察？　それよりもここはどこなの？　唯一頼りになりそうなスマホは圏外。充電もないしギガもない。せっかく転生するくらいならチートを使って伝説級に強くなりたいところなのに初期装備があまりにも酷い。とりあえず早くこの世界から帰らせてほしい。そう思っているところに二足歩行の猫がやってきた。

「大きい音が鳴ったと思ったら、あなただったんですね。最近はあんなに大きい音は聞かなかったのでビックリしましたよ。ニャン。」あまりにもよくわからない語尾に、しれっとお前の体重は重たすぎるのではないかというメッセージを込めてくるあたりこの猫には好感が持てない。そして言語が伝わる安心感を同時に覚える。

「あの、気が付いたらここにいたんですけど、どうやったら帰れますかね。あ、あと肉まん見てないですか。」

「その肉まんってものはよく知らないんだけど、そんなに急がなくてもいいじゃない。ニャン。」よくない。私は早く帰って温かいお風呂に浸かって眠りにつきたい。「ニャン。」じゃないんだよ。早く返してくれよ。

「とりあえずここに座っててください。他の者がもてなすので。ニャン。」早く帰りたい気持ちはあるが、どんなことをしてくれるのかの方が気になって気になってしまった私は、言われるがままに座った。ややあって3，4匹程度の子猫が料理を担いできた。見覚えがある気がしたそれは4分の1程度の肉まんだった。

「これ私の肉まんじゃない！　あなたたちが盗んだの！？」かなり楽しみにしていたこともあって勢いに任せて大声を上げてしまった。猫たちは体をビクッとさせた後、ニコッと笑って、

「これ、あなたがくれたんですね！　ありがとうございます！　おいしそうだとおもっていたんですけど、あつくて、なかなかたべられなくて。にゃん。」

「みんなで、さましながらたべたんです！　おいしかったです！　ありがとうございます！　にゃん。」次々とフワフワした小さい可愛い子猫たちにお礼を言われ、少し気分がよくなっているところに、さっきの猫よりも少し大きい猫たちがぞろぞろと私たちがいる間に入ってきた。

「あの、もう少しで発表会があるんです！　そのために練習しているダンスを見てもらえませんか。にゃん。」あまりにも聞いたことがある展開に驚きながらも頷き、その練習しているダンスを観させてもらった。ビックリした。かなりビックリした。この流れ的に盆踊り的な和を感じるものを勝手に想像していたが、時代に沿って変化はしていくようで、ヒップホップであった。ヒットとか普通に打っていた。猫のくせして。

　呆気に取られていると猫たちのおもてなしは底をついたようで、最初に話しかけてきた猫がお別れの雰囲気を出しながら奥から出てきた。この流

れは完全にお土産として大きなつづらと小さなつづらを出されて選ばされる。小さい方を選ぶのが最も安全な道。大きい方を選んだ人は某昔話ではいなかったはず。ならば大きい方を選んでみるしかない！　そう思っていたのだが、

「私たちができるおもてなしは全部したのですが、満足されましたか。帰りの道は間違えないように気を付けてくださいね。ニャン。」そう言われて追い出された。何か悪いことをしたのかと思うほど最後に突き放すようにされて落ち込んでいたら、辺りはいつも乗る電車の中で普段と変わらない帰り道になっている。肉まんとほうじ茶は手元になく、一連のことが夢オチという言葉でしか片づけられないことに気が付き肩を落とした。

「せっかく、小説のネタになりそうと思ったのに。」ボソッとそう口にし、バッグからスマホと絡まった有線のイヤホンを取り出す。

　それらを取り出す疲れたブレザーの袖には細くて短い毛がくっついたままだった。

折下ふみかと大迷宮

トシ蔵

おもいのほか、彼女は「タイムパラドックス」の迷宮に陥ってしまった。たとえば、である。かりにタイムリープが可能だとして、私が未来にいったとする。そこに私はいるのだろうか。未来にたどりつくべき私は私の現在を置き去りにして、いま「未来（ふ）」にいる。ってことは、論理的帰結として私がいまいる「未来（ふ）」に私はいない、だろう。そうなるとその「未来（ふ）」は私なしで進行した時間軸上にあるのだから、そこでもし（それが10年後だとして）有馬記念の勝ち馬を知り得たとしても、私が私の現在にもどってからその10年後の有馬記念で勝ち馬はこれだと馬券を買ったとしても、私が「未来（ふ）」で知り得た勝ち馬が勝つとは限らない、はず。私が過去にいった場合はどうか。その「過去（み）」にはとうぜん「過去（み）」の「私（み）」は存在する。そこにはなんら問題はない、けれども。未来の私が少しでも「過去（み）」を改変しようとするとどうなるか。たとえば「私（み）」がもっと勉強するように私が置手紙などをこっそりおいておく。「私（み）」はその手紙をなにげなく手に取って読むともなく読み、わが身を顧みて、妙に学習意欲が高まり、勉強にいそしむようになってしまう（私のことだからきっとそうなる）。それはよい。しかし本来の私の過去にはそのような「事実」は存在しない。そのことによって改変された「過去（み）」に基づく未来としての「現在（か）」は私の現在とは大いに異なるだろう。では現在の私はそのことによって変化を余儀なくされるのか？　「過去（み）」の私が大いに勉強したせいで私のいまがおおきく変化したとしたら、「現在（か）」の私は「過去（か）」の私に勉強させようとするモチヴェーションがなくなるだろう。そうなると「現在（か）」の私が「過去（か）」にさかのぼって私を発奮させるようなことはなくなってしまう。そうなると、結局私が私の過去に行くことはなくなり、私が過去の自分を発奮させた私の現在はすがたをけしてしまう……。あれれ。おかしなことになっちゃたな。これじゃ「バック・トゥ・ザ・フューチャー」は成り立たないぞ。困ったふみかに天啓がくだる。タイプリープを実現させる唯一の解決策はパラレルワールドだ！　いくつもの次元があるならば（たとえば、「ふ」「み」「か」）、過去や未来への行き来は可能だろう。でもその過去や未来はいまの私の時間軸とはことなる世界である。そうなるとタイムリープに意味はあるのか。父親がおもしろそうに読んでいたフィリップ・K・ディックのSF短篇をよみ、いたく感動した折下ふみかは自身でタイムトリップもののSFに挑戦しようと奮い立ったのだが、おもいのほか、彼女は「タイムパラドックス」の迷宮に陥ってしまった……。

みんなの「ふみか」特集、おしまい

知らない星の、大好きな貴女たちへ

みみず

現実逃避。誰でも一度はしたことがあるであろう、現実の辛い状況から目を逸らし、別のことに没頭する行為のことである。

「きゃっ」

「お前キモいんだよ！！」

「うちらの視界に入るなし」

学校裏に呼び出され、壁に叩きつけられ、罵倒され……所謂いじめだ。

たしかに容姿には私自身も自信が無い。気持ち悪いのかもしれないけれど、それを不快に思ってわざわざ本人に伝えたり、傷つけたりする意図が分からない。見たくないのなら見なければ良い。いじめる方が私のことが視界に入るんだから、いじめなんてしない方がいい。でも、そんなことをあいつらに言ってしまえば、多分、余計怒らせるだけ。そう思って、私はただ耐え忍んだ。

土汚れの目立つバックを拾い上げ、夕焼けに照らされながら帰り道を進む。辺り一面オレンジに染まっているおかげか、土汚れはその景色に溶け込んで目立つことはなかった。セットしてきた髪も、あいつらのせいでボッサボサ。くせっ毛だから直すの大変だったのに。

道の周りに生い茂る雑草が風でさらさらと靡く。足を上げるのも億劫だからと擦るように歩けば、その度に土がガリガリと音を立てた。空は綺麗にオレンジ色に染まっていて、ところどころにある雲も同調するようにその白を捨てている。

クラスメイトも、先生も、家族も、誰も私を助けようとしない。私が悪いんじゃないかだとかほざく始末だ。

「私が悪いって言いたいわけ？　ふざけんな……合わせろって言うの？いじめられるのを受け入れろって……？」

ふざけるな、そんなの嫌だ……そう呟きながら歩くけれど、それで気持ちが晴れることはなく、むしろ虚しさが増していくだけで。

「っうう……うぁぁ……」

気づけば嗚咽していた。どうして私がこんな目に遭わなきゃならないんだ。悲しくて悲しくてしようがないのに、家に帰って慰めてくれる人はいない。お父さんは随分前にいなくなって、お母さんはそれからお酒に溺れるようになった。何もかも自分でやらなきゃだし、何か口に出そうものなら空き缶を投げられる。だから同時期から相談なんてことできなくなった。

一通り家事をし終えて、自分の部屋に戻った頃にはもう夜だった。

「はぁ……」

布団に潜り込んで目を瞑る。私のちっぽけな体温が、この時だけは私を安心させてくれる。

「……友達、ほしいなぁ。あったかい家族も……誰でも、なんでもいいから……」

自分の理想を思い浮かべてみる。容姿に関係なく、助け合って、慰め合って、前に進んでいく、そんな……素敵な世界に……

「わぁ！？　だぁれこの子！　人間かな？」

「ど、どうしよう！　風邪ひいちゃわないかな！？」

「いや、それよりケガないか確認しなきゃよ」

…？　何だか騒がしい。そう思って目を開けると、そこには可愛らしい動物が三匹いた。

「えっ？　えっえっ？」

「わ、ああ……ええっと、いきなりで困惑するよね……？」

赤いワンピースとリボンを身に着けているウサギがそう話しかけてきた。

「あ、あなたが私をここに……！？」

「えっ知らないよっ！？」
二足歩行で黄色のTシャツを着ている子豚がウサギを援護するように口を開く。
「ボクらはたった今ぁ、突然現れた君を見つけたんだぁ！　本当だよぉ」
信じられず睨んでいると、二匹に比べてとても大きな……水色のビックシルエットTシャツを着た牛が歩み寄ってきた。
「ごめんなさいね。いきなりのことで、私たちもあまりよくわからないのだけれど……。敵意はないし、貴女のことを魔法か何かでここに呼んではいないのは本当よ。」
あまりに優しそうな笑みを浮かべるので、私は目を逸らした。
「貴女はどこから来たのかしら。」
「夕焼市……いやわかんないかな…ええっと……ち、地球」
「チキュウ？　うーん…ごめんなさいね。私たちは知らない所みたいね……ああでも、長老のかめじい……かめさんなら何か知っているかもしれないわ！とっても長い間生きている方だから、もしかしたら貴女がここに来た理由や、貴女が帰る方法も分かるかもしれない」
「は、はぁ……」
いきなりのことで、何が何だかわからない。そう顔に出てしまっていたのか、牛は申し訳なさそうに微笑んだ。
「ごめんなさい、一度に話しすぎては混乱してしまうよね。よければ、私たちのおうちにいらっしゃいな。きっとこの世界で頼れるのは、まだ私たちしかいないでしょうし……」
「え…あ、はい……」
当たり前のように家に招待されるものだから困惑してしまって、つい素っ気ない返事をしてしまった。なんでこの方はこんなに優しいのだろう。見ず知らずの……種族も違う私に、どうして手を差し伸べてくれるのだろう。
「どうぞいらっしゃい！　今日のお夕飯はカレーなのだけれど、食べれるかしら。」
「ええっと、はい……あ、あの」
「あっ大丈夫よ！　お肉は使っていないわ！　そんな恐ろしいことしないわよ、大豆を使ってお肉みたいな味と食感を……昔はお肉を食べていたのだけれど、それではどこかの種族が悲しむとなってね、それ以来、動物からお肉をとることはなくなったのよ。今は平和よ。」
「うーん、その、ちがくって……」
私は少し口をつぐんだが、思い切って質問してみることにした。
「あの…な、名前は」
「名前？　ああそうね、そういえば。」
牛は私の前に屈むと、私の手を取って笑いかけた。
「私はリリーよ。子豚のペチュと、ウサギのガベラもよろしくね。」
「ど、どうして私を助けるんですか」
「あら？　助けることに理由なんて要るかしら。貴女みたいな可愛い迷い子を放っておくなんてまず無理よ」
……「可愛い」…かぁ。そんな言葉、いつぶりだろうか。噛み締めるように頭の中で反芻した。
「私からも質問していいかしら？」
「あっはい」
「お名前は？」
「伏葉…伏葉佳毬（ふしばかまり）です」
「カマリ、ね！　じゃあ改めまして、今日から帰るその日までよろしくね。」
「…！！　はい！　リリーさん、こちらこそよろしくお願いします」

　それから、ご飯を食べさせてもらったり、一緒のベッドで寝たり……数日も過ごせば彼女らとの仲はぐっと深まった。ただ、外出は必ず誰かの同伴が無ければ駄目だった。平和とはいえ、私みたいな別世界から来た者を毛嫌いする者や、利用価値を見出そうと攫う者がいるらしい。ペチュやガベラとの外出はとても楽しいので良いけれど。そんな中、牛さん…リリーさんは私が

元の世界に帰る方法を聞くため、かめさんと日程調整をしていたようで、
「明日、お話の時間が取れるそうよ！」
今朝勢いよくドアを開けると、リリーさんは興奮しながらそう言った。

　この動物たちが住まう町は、とある建物を囲うように家々が建てられている。その「とある建物」というのが、かめさん……愛称で呼ぶならばかめじいの家だそう。かめじいはずっと昔から住んでいるためか、あらゆる知識に富んでいるらしく、困った住民がどこに住んでいようと迷わずすぐに向かえるようにと、囲むように家が建てられたのだとか。
「かめさん、いらっしゃいますでしょうか」
「おうおういるわい。かしこまらんでゆるーくすることさね。儂も疲れてしまうわ。」
「ありがとう、かめじい。ほらおいでカマリ」
「っはい」
かまじい、という名前にふさわしく、彼の顔には深いしわが刻まれていた。そのしわに比例するように、彼の懐も深くなったのか、とてもやさし気な、穏やかな笑みを浮かべている。いや、元からなのかもしれないが。とにかく彼の雰囲気はとてもあたたかいのだ。
「おお、君か。突然現れた、人間という種族の……カマリさん、と言うたかのう？」
「は、はいっ！あの、こういうことって今までに――――――――」
「あったぞ。」
「えっ、ほ、ほんとですか」
「…嬉しくなさそうじゃのう？」
「ああ、いやその…えっと」
「まあいいわい。最後どうするかはお主が決めるのじゃぞ。過程がどうであれ、最後はまぎれもなく自分の決断であるのじゃ。後からどうこう嘆いたって戻らんもんは戻らん。こう言われたから、で決断しては、きっと後悔するぞ。いいな。」
「はい…」
怒られたような、諭されたような。穏やかな彼の目を見るに、怒っているわけでないのかも。
「それはさておき、本題に行こうかの。ええと、どうやって移動したか、どう戻るか、じゃな。」
かめじいはふうと息をつき、腰をさすりながら言った。
「単純な話なんじゃ。まあ単純であって不可解なんじゃがね」
「と、いうと？」
「思いの強さ、なんじゃ。どれだけ別世界に行きたいと願うかなのじゃ。」
「…えっ？」
「きっとお主は…現実逃避という形で、別世界へ行きたいと強く願ったのじゃろう。その思いがあまりに強すぎて、現実となってしまったのじゃよ。」
なぜ、現実逃避していたことを……？　と質問する前に、かめじいは言葉を続けた。
「別世界に行きたいなんぞと思うのは、大抵そういう時じゃろうと思ってな。まあ現実逃避しなくても、想像力に満ち溢れている者が稀に飛ぶがな。そういったタイプには見えないし、消去法で前者じゃと思ったんじゃよ」
「……」
かめじいは真剣なまなざしをこちらに向けた。
「それほどの苦痛をそちらの世界に抱えたままでいるのに、帰りたいと本当に思っておるのか」

　何も言えなかった。リリーさんが、一緒に考えます、だとかなんとか言っていた。気づけば家が遠くにあった。帰り道のようだった。夕焼けのない不思議な世界だというのに、何故かあの日が蘇る。虚しい帰り道。空っぽの家。体温に混ざって孤独を紛らわせた夜。あの日、あの時、痛かったんだ。たしかに。胸が、心が、どうしようもなく。空腹時に胃が痛むように、空っぽの

心を無慈悲に酸で溶かされるような、そんな痛み。
「っうう……うぁぁ……」
「ど、どうしたのカマリ！？」
「…ほんとは、帰りたく、ない……ようやく、あったかい家族も、友達もできたのに…容姿も気にしないで受け入れてくれる、素敵な人たちに出会えたのに……帰っちゃったら、また…ひとりぼっちになっちゃうじゃんか…」
敬語を使うのも忘れて、私はリリーさんに抱きついていた。
「お母さんと、ペチュとガベラとお別れしたくないよ……」
ずーっと思っていた、リリーさんがお母さんなら良いのにな、って。今になって、別れが来てから、それがあふれだしてしまった。
「カマリ…私の大切な子…貴女は帰らなきゃなのよ……」
抱きしめ返されて、自分の子だと言われたって、帰らなきゃなんて言われては素直に喜べない。
「やだ、嫌だよ…」
「いい？　カマリ…貴女は優しくて、可愛くて、素敵なところが沢山ある自慢の子よ…でもね、だからこそ私は貴女の住んでいたチキュウに帰らなきゃなの」
「なんで！！」
「貴女は別世界から来た存在…このことが知れ渡っては、きっと良からぬことを考える者がきっと現れる。」
「だとしても…！」
「それに、折角の故郷を嫌ったままで一生を終えるのは、とっても悲しいことだと思うの。記憶も思いも、きっと時が経つにつれて薄れていってしまう…そうなれば、どんなに願っても貴女は戻れなくなる。」
帰りたくなるわけない、そう言おうとした。でも、お母さんの肩が震えているのに気づいて、何も言えなくなる。
「貴女は優しい子だから…きっと今まで抵抗してこなかったのね。溜め込んで、耐え続けて…。でもね、カマリ。貴女みたいな素敵な子が、そうやって傷つくのは見たくないわ。だからね、良い？　カマリ。もしもチキュウに帰ってみて、また誰かに嫌な子とされて苦しいなら、逃げるのも手なの。」
「逃げる…？」
「そうよ。私は貴女と暮らしてみて分かったの。貴女は悪くない。もしも責められたり、いじめられたりしているのならば、それは周りが貴女に理不尽に怒っているだけよ。環境が悪ければ、どんなに尽くしても遜っても、逆に怒り返しても、何も変わってはくれない。だから、どこかに助けを求めるの。貴女のことを大切にしてくれる人はきっと、遠いだけで沢山いるから。」
「そんなの分かんないじゃん……」
「ううん。私たちがその何よりの証拠よ。」
「え…」
「貴女の世界と、私たちの住まうこの世界はきっとすっごく離れている。でも、それでも私は貴女のことを大好きになって、貴女を子供のように思うことができた。」
私が顔を上げると、お母さんはやはり泣いていて。
「だからね、カマリ。貴女は、貴女の生まれたチキュウで、沢山人と関わって合う人を見つけなさい。お母さんはここから応援しているからね。……大好きよ、大好きよカマリ…っ」
「カマリ帰っちゃうの！？　そんなっお別れなら早く言ってよ！！　お見送りくらいさせて！！」
「そぉだよぉカマリぃ！　寂しいじゃないかぁ」
ガベラとペチュが駆け寄ってきた。どうやら帰りが遅いのを心配して帰ってきたらしい。
「ガベラ…ペチュ……」
「お別れは悲しいけどさっ笑顔でさよならをしようよっ！　思い残したくない！」
「それがいいやぁ、ほらぁお母さん、泣きすぎは良くないよぉ」
「っそうね、泣き止まなきゃね…」

二人とも涙目だけれど、精一杯元気に振舞ってくれている。私は余計に泣いてしまいそうになった。
「わっ泣かないでよっもう！　ほら、これあげる！　私のお気に入り！」
ガベラは赤いリボンをするりと解くと、私の手首に綺麗に巻きつけてくれた。
「いいの…？」
「いーの！　代わりに、私たちのこと、忘れないでね！　あ、また戻ってきちゃ駄目だよ！」
「…ふふっそうだね」
私が笑うと、ガベラとペチュは顔を見合わせて笑った。

「かめじいが言ってたわ。別世界に飛ぶ前にしていたことをしながら、元の世界に帰りたいと強く願うと良いって。」
「私…私寝てた。寝室のベットで」
「じゃあ皆でぎゅってしながら寝ればいいんじゃないっ！？」
「それはありだねぇ」
「ふふ、そうしましょうか。それで良いかしらカマリ」
「…うん！」
　そうして全員で一つのベットを使った。全員に抱きしめられたからか、少し苦しくて狭かったけれど、暑いくらいの体温が私を心から安心させてくれた。
　その体温を感じているうちに、私の意識は段々と薄れていった。

「「おやすみ、カマリ。」」

「……ん、」
気づけば、いつもの布団を被っていた。戻った、のか。そもそも、あれは夢だったのかも？
「ま、いっか」
重たい布団を撥ね退ければ、体は随分と身軽に感じられた。着替えよう、そう思ってパジャマを脱ごうとした。が、腕が思うように抜けない。何か引っ掛かっているようだ。
「あ……ふふっ」
私はパジャマの首元のボタンを何個か外して慎重に脱ぐと、お母さんに否定されて着るのをやめていた、自分のお気に入りのビックシルエットTシャツを着た。やっぱり素敵な黄色。
「よおし。」
私は荷物をまとめて玄関からバッと飛び出すと、近くの駅に向かって走った。
　あったかい家族、素敵な友達。偶然出会えた彼女らとの短くも充実した日々が、私を変えたのだ。ならば今度は、私が変わるべきだ。偶然を待つ暇なんてない、自分で掴んでみせる。そのために逃げる…いいや、進むんだ。私に合う素敵な世界に会いに行こう。私は一人じゃない。遠く。ずーっと遠くの、どこかの世界から、彼女らは私を応援してくれているんだから。

　素敵な青空の中、素敵な風で、素敵な赤いリボンを手首でたなびかせて、素敵な未来を掴むために、私は電車に乗り込んだ。

ある家族の物語

ラギ

午前六時。
カーテンが閉め切られ、真っ暗な部屋の中に、一条の光が差し込んでいる。
部屋の主はまだ目覚める気配はないが、別の部屋ではむくりと起き上がった小柄な人影があった。
午前七時。
ようやく目を覚ました主は、二度寝しようか迷ってから、しぶしぶと起き上がった。
二度寝して叱られるのは避けたい。
ただでさえ予定のない日は夜更かしや二度寝で叱られているのだから。

のそのそと階段を降り、キッチンへと向かう。
「…おはよう」と声をかけると、静かだがはっきりとした声が返答した。
「おはようございます。」
目を向ければ、緑がかった黒髪の、小柄な青年が立っていた。
その手には、朝食であろう、焼きたてほやほやのオムレツの載せられた皿が載っている。
空いてるんだか空いてないんだかよくわからなかったお腹が、明確に空腹を出張し始めた。
「ノア、起こしてきてくれますか。」
「わかった。」
返事をし、朝食を並べる青年に背を向けて和室へ向かう。
丸まって眠る彼を起こし、猫のようにうにゃうにゃ言うのを引きずって連れていくと、さっきよりもはっきりと、朝食のいい香りが漂ってきた。
食卓の上にはほかほかのご飯にオムレツ、野菜炒めとわかめのお味噌汁。

「ちょうど準備ができたところです。いただきましょう。」
二人に気づいた青年が声をかけると、引きずられていた方の青年がぱぁっと顔を輝かせた。
「ごはんだ！」
「さあ、座って。それじゃあ、いただきます。」
「「いただきます。」」
ごはんを一口、口に運んで、今日も一日が始まる。

この家には、三人の青年が暮らしている。
家の主である青年と、彼の友人兼世話係である青年二人。
屋敷の主は青い長髪を一つに括った青年で、名前を朔夜零という。
年齢は十八歳。
かなりの人間嫌いで、学校には通っていない。
祖母譲りの予知能力を用いて、祖母の跡を継ぎ、占い師をして暮らしている。
そんな彼を支えるのが、生まれたころからの友人である、凜とノアの二人。
六年前、両親を亡くし一人暮らしをすることになった際に、いくら練習しても家事が上達せずに困っていた零と、都会に出てきたばかりで家を探していた二人の利害が一致し、同居することになったのだ。
凜は、屋敷の手入れや家事を担当している青年。
緑がかった黒髪に幼げな顔立ち、小柄な体格と、零と同年代に見られることが多いが、実は二十代前半である。
ノアは青みがかった銀髪にエメラルドの瞳を持つ、猫好きの青年。
天然でほわほわした言動だが、三人の中では最年長である。
基本的に零と一緒に行動し、仕事のサポートをしている。
言動の天然さも相まって他二人と同年代に見られがちだが、零とは一回りも離れている一番の外見マジシャンである。

午前十一時。
ぴんぽーん、とチャイムが鳴った。
「はーい。」
玄関を出て、庭を横切って門扉を開ける。
門の前にいたのは、アイスシルバーの髪の少女だった。
「おや、ノアじゃないか。久しぶり。」
「久しぶりだね、せつな。」

黒崎せつな。
東北地方のとある山麓地域に住む、零の友人の一人。
零よりも年下だが、体術をはじめとする武術を修めており、その年齢にそぐわないくらいの頭脳を持っている。時々零を訪ねて来ては様々な話をしに来る、少し変わり者な少女である。

「零はちゃんと仕事をしているか？」
「もちろん。俺がついてるからね。っていうか、それなりに年下のせつなに仕事の心配をさせるとは…」
「別に、生活が立ち行かなくなるとは思っていないよ。ただ、人嫌いの零には出勤を伴う仕事じゃなくてもキツイだろうなって。ま、だからこそのノアと凜なんだろうけど。」
零は縁側で本を読んでいた。
「予定より早かったな。」
「初めて飛行機使ったんだけど、あまり迷わずに済んだんだ。」
「それはよかったな。」
「そうだ、一つ頼みがあるんだけど。」
「？なんだ？」

正午。
漂ってくるおいしそうな匂いに、一同は食卓に集まった。
食卓の上には、食パンの袋に洗ったレタスの盛られた皿、小鍋いっぱいのミネストローネが載っている。
ちなみに、ミネストローネはせつなとノアが共同で作ったものである。
「「「いただきます。」」」
昼食はミネストローネと、各々が好きなように作ったサンドイッチだった。

携帯が鳴った。
「…？」
見ると、メッセージを受信したことを示すランプがついている。
メッセージには、たった一言。
「夕方頃に行く。」

午後五時。
予定外の来客である。
先程メッセージを送ってきた相手が叩く音に、門扉を開けてやると、そいつが興奮気味に飛びついてきた。
「零！　とてもいいものを見つけてきたのだ‼　一緒に読もうではないか！」
「ああ。だがまずは上がれ。」
「確かにそうだ。…お邪魔します。」
促せば、素直に頷いた。
「いらっしゃーい！って、久遠じゃないか。よく来たね。」
「久しいな、ノア。」

穂鷹久遠。
名家、穂鷹家の跡取りであり、零の友人の一人。

書物を読み、〝自分が知らなかった知識〟を識ることを好む。
よく新しく本を手に入れては、嬉々として零を訪ねてくる。
零もまた、本を読むことを好むため、顔にこそ出さないものの、嬉々として迎え入れている。

「今日は何の本なんだ？」
「お前が探していた古書だ！　知り合いの店主がな、少し話したのを覚えていて、教えてくれたのだ！」
「それは楽しみだ。」
「私も読んでもいいか？」
「せつなか。来ていたのか。もちろんだ、三人で読もう!!」
仲良く話し込む二人に加わるせつな。
彼らを半開きになった障子の隙間から眺め、ノアは台所に向かった。
「りーん。」
「ノア。どうしました？」
「零が久遠と話し込み始めたからさ。今日はせつな嬢も一緒に。」
「なら、夕食は久遠の分も作っておいたほうがいいですね。」
「そう言おうと思ってさ。よければ手伝うよ。」
「ありがとうございます。お願いします。」
「普段から家事を任せてるからね。これくらいはさ。」
「こちらこそ、気分屋な零の相手をしてもらっていますから。ノアが零といてくれるおかげで、零はちゃんと仕事ができますし、俺もこの家の管理に専念できます。」
「ふふ、ありがとね。俺も、凜が家のことをやってくれるから零と一緒にいられるし、零の仕事を手伝える。俺も助かってますよー。」
「ふふ。」
台所にはおいしそうな料理の匂いと、あたたかな彼らの笑い声が漂っていた。

「…でもさ。」
「はい？」
「今話してて思ったけど、改めて考えてみると、凜が零と一緒にいる時間って、俺と零が一緒にいる時間よりも短いわけだよね？」
「そうでもないと思うけれど…零が仕事をしているときはあまりそばにはいないけど、そうでなければだいたい一緒にいますよ。」
「そうだけど…でもなんか短い気がするからさ、明日はみんな一緒にいようよ。せつなも午後には帰るから、午後いっぱい、時間はあるよ。」
「…理屈はよくわからないけれど、零がいいなら。」
「だめとは言わないよ。だって、零だもの。」
「…まぁ、そうですね。」

午後七時。
ごはんですよ、という凜の声に、書物に夢中だった三人がいっせいに凜の方を向いた。
「今日はノアも手伝ってくれたんですよ。」
「今日もおいしそうだな。」
「ちょっと腕が上がったんじゃない？」
「あのときはご迷惑をおかけして…」
あはは、と明るい笑い声が響く。
ごはんと作り立てのドライカレー、たまねぎのシンプルなスープ。
五人で食卓を囲み、笑いながら箸を取った。

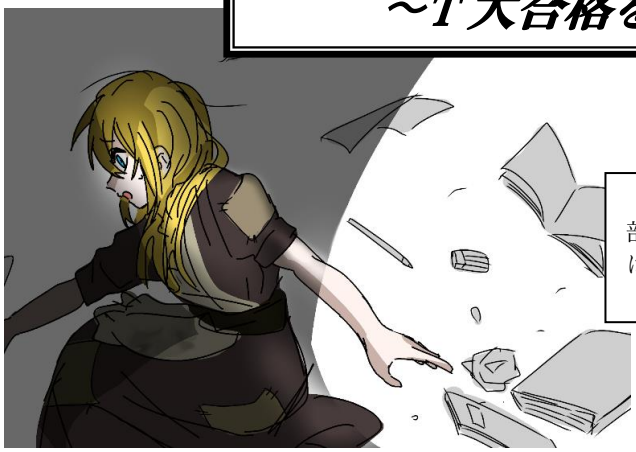
午後十時。
「俺はそろそろ寝させてもらう。おやすみ。」
「私も寝るね。おやすみなさい。」
「おやすみ。」

「おやすみなさい。」
「おやすみー。」
朝が早い久遠と睡眠時間が長いせつなが眠り、部屋に静けさが訪れた。
「相変わらず、二人とも健康的な生活らしいな。」
「久遠は朝が早すぎるような気がしなくもないけどね。」
「せつなは年齢的には中学生くらいですからね。健康的なのはいいことです。零も、せつなを見習ってくれるといいとは思いますが。」
「わぁ、飛び火したー。」
「うるさい。俺が早寝は無理だろう。」
「まぁ、わかっていますよ。趣味が天体観測の人に早寝しろ、と言うのは酷ですね。」
「…まあ、今日は早めに寝るよ。」
「俺たちもそうしましょう、ノア。」
「そうだね。」
夜は更けてゆく。

翌日、五人で作った朝ごはんを食べて、久遠とせつなは帰っていった。
「次はいつ来ようかな。」
「またおもしろい書物を見つけたら持ってくるからな!!」
そんな言葉を残して。

本物よりも、本物らしく。
誰一人、血が繋がっていなくとも。
彼らはきっと、家族だった。

受験姫のサンドリヨン
～T大合格を目指して～



「ない、ない、ない…！」
部屋のものをすべてひっくり返す勢いで、シンデレラはノートを探していた。
「どうしよう…あれがないと勉強ができないのに…」

嘆くシンデレラのもとに現れたのは、継母と二人の義姉だった。
「あんたが探しているのは、このノートかしら？」
義姉の手には、シンデレラが探していたノートがあった。
「それです！」
すると義姉は、ノートをひらひらと振りながらシンデレラに言った。

「T大に行きたいって聞いたけど、本当？」
「えっ、はい…」
シンデレラが頷くと、義姉はノートを床に叩きつけた。
「あんたなんかがT大に行けるわけないでしょう？私達よりバカなんだから。」
「そうよ、お姉様の言う通り。私達より勉強ができなくて、成績も悪いあなたが、T大に行けるとでも？」

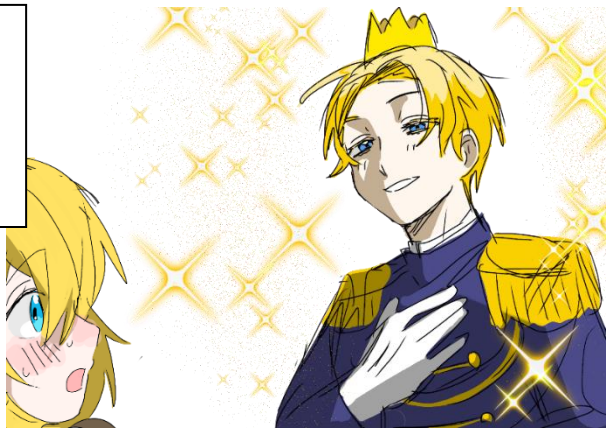
ぐしゃっ。義姉はノートを踏みつけた。
「…っ！」
思わずシンデレラは、ノートを拾うと家を飛び出した。

シンデレラが近所の公園で、ノートを抱えてうずくまっていると、
「大丈夫？シンデレラ。何かあったの？」
声をかけてきたのは、近所に住む魔法使いだった。
「魔法使いさん…あのね」
シンデレラは家であったことを全部魔法使いに話した。

「なるほど…私にまかせなさい！私が勉強を教えてあげるわ!!」
「いいんですか？」
「私がいいって言ってるんだから、いいの！」
そうしてシンデレラは、魔法使いに勉強を教えてもらうことになったのだった。

ある日、シンデレラは魔法使いとの約束に遅れそうで、街を走っていた。
ふと肩を叩かれ、振り向くと、そこにいたのは、金髪の、華のある青年だった。
「これ、落としましたよ。」
青年は、シンデレラのノートを持っていた。
「ありがとうございます！」
「では、僕はこれで。」
そう言うと、青年はシンデレラに背を向けて去っていった。

「わっ！」
「うわぁっ!?」
「どうしたのよ、そんなぼーっとしちゃって。王子に一目惚れでもしちゃった？」
「ぜっ、全然そんなことないです！…って、魔法使いさんはあの人と知り合いなんですか？」



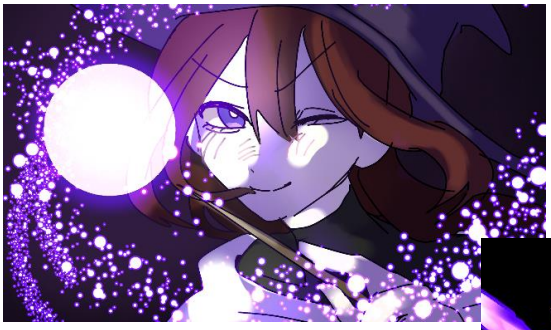
「うん。あいつ、私の友達で、T大の王子って呼ばれてる、有名人なのよ。」
「すごい人なんですね…」
「ふふ。さぁ、そろそろ行きましょう。」
「はい！」

こうしてシンデレラは魔法使いとともに努力を続け、とうとう1月の共通テストと、2月の二次試験という、二度の武闘会を突破したのだった。

祝
武闘会
突破！

合格の余韻に浸るある日、シンデレラの家に、魔法使いからの招待状が届いた。
魔法使いと王子に出迎えられて家に入ると、部屋はパーティー会場のようだった。
「これは…？」
「合格したんですもの、お祝いパーティーをしなきゃ。」

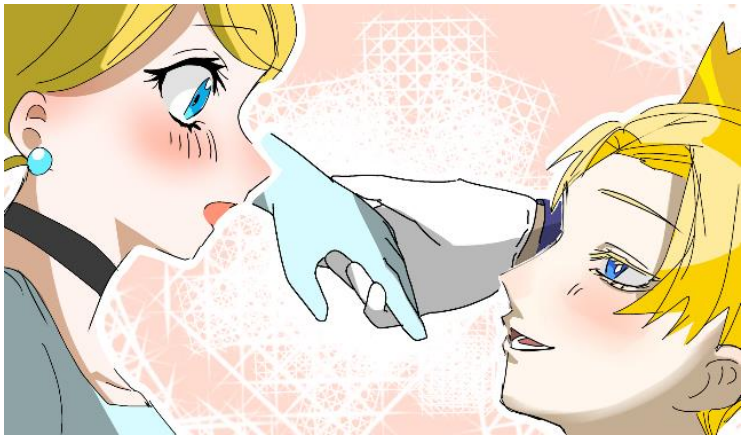
その言葉にシンデレラはぱっと顔を輝かせたが、すぐに俯いた。
「でも、私…パーティーに着るドレスもアクセサリーも、何も持ってないです…。こんな格好でパーティーなんて…」



「大丈夫、私にまかせなさい！えいっ!!」

「ほら、こんなにきれいになっちゃった！」
魔法使いは嬉しそうに笑った。

その時、王子がすっとシンデレラの前に進み出た。



王子がシンデレラの手を取り、膝をついて、言った。
「一目見たときから好きでした。僕と結婚を前提に、付き合ってください。」
「…っはい！」
シンデレラが王子に一目惚れしたように、王子もまた、シンデレラに一目惚れしていたのだ。

その後、二人は仲良くＴ大ライフを過ごしたのだった。めでたしめでたし。

END

銀平糖

金木犀頬をなでる六限目
秋の苦か昔を思う平均点
さわさわさわ食欲を呼ぶ稲の音
クリスマス雪になりたいみぞれかな
本心は黒い空から白い雪
ふり向けば雪面に描くわたしの軌跡
もてはやす雪だってただの雨ヨ

ラギ

また一つ 秋を浮かべて 錦かな
空渡り 雁と見紛う 飛行機よ
読書の秋 ふと窓見れば つるべ落とし
願っても なかなか逢わぬ 雪景色
天狼を 覆い隠して 冬が降る
背中押し 鳴きつつゆくか 虎落笛
雪起し 聞いて覗いて 眺む庭
冬雲は 雪を連れるか 今度こそ

神樂坂

指絡み濁り酒には酔えぬまま
木犀の香に踊らされ覚めぬ夢

みんなの俳句

コスモスの色に魅せられ揺れる影
温もりに雪と時間は解かされて

みみず

赤と黄の　唐衣(からぎぬ)纏った　山粧(よそお)う
丸っこい　頬と銀杏　我が子の笑顔
帰り道　夕日で染まった　赤とんぼ
雪の降る夜に見つけた覗く星
赤い鼻隠そうとした雪の白
朝6時起きろ起きろと光る雪
白雪を踏んでは濁した登下校
雪持てば錦鯉へと化けた手の平
お化粧も上手なのねと雪に委ねて
かろやかに長靴鳴らして雪と舞う
しまり雪縮こまっては似た者同士

幻想翡翠

香り立つ金木犀の通学路
朝冷や淋しさに泣く曇り空
今はなきかつてを想う秋の暮
寒き朝車に乗るが息白し
身震わせバランス崩す木枯らしや
銀世界一歩踏み出せ別世界

☆創作閑話☆

◆ここまで読んでくださってありがとうございます。幻想翡翠です。二作品とも結構な大作になってしまいました。正直疲れました。でも書いていて楽しかったのでまあいいでしょ～（蒟蒻畑オレンジ味の気持ち）と思っています。そういえば「故人」なのですが、次回のせせらぎで夢野アスカ視点Ｖｅｒ．を書こうと思っています。楽しみに待っていてくださると泣いて喜びます。私が。【幻想翡翠】

◆折下ふみかちゃんはただの可愛い高校生であってあんなんじゃないです！！　多分！！　一応、解説的なのを少々……。「折下ふみかの華麗なる冒険」というタイトルで載せられている文章は、文芸部員が月ごとに担当しているものなので口調がその人ごとに全然違うんですよね。そこに目をつけまして、「折下ふみか」という存在は書く人ごとにあって、それによってふみかちゃんの人格は異なっていて……みたいな。二次創作とかも、そういうものじゃないですか？　公式では温厚なキャラなのに、二次創作ではちょっと怖い一面が……みたいな。そういう、本人じゃないけど本人の名前を持った存在的なのを書きたくなって、結果こうなりました。どうか、あたたかーい目で見てくだされば幸いです。【みみず】

◆ここまで読んで下さりありがとうございます。折下ふみかちゃんの話を部誌用に作成することは初めてだったので、普段のブログとは異なるジャンルに挑戦してみました。深夜に勢いで書いたため、ふみかちゃんの元の性格から大いにかけ離れてしまっている部分が大半だったと思いますが、一種のエンタメだと思って読んで下さると大喜びです。【神樂坂】

◆「もう一度あの空を飛ぶために」を書き始めたきっかけは、妹の合唱練習です。合唱曲に「あなたへ―旅立ちに寄せるメッセージ」という曲があって、それを妹が家で練習していたんです。その歌詞の中に「荒んだ心に刺さったのは意外な奴の言葉だった　もう一度もう一度あの空を飛べるかもしれないと思った」というのがあるんです。その部分が不思議と心に残って、そこから自分なりに膨らませて話を書いてみました。歌詞の解釈については、解釈違いがあっても、一人の考えとして、多めに見てくれると嬉しいです。

「折下文香の年明け」は季節感のあるほっこりした話が書きたいなと思い、書きました。この話に出てくる「本葉（もとは）」のフルネームは「圖書（ずしょ）本葉（もとは）」といいます。実はこの名前、文芸部のキャラクター（折下文香）の名前を決めるにあたって候補として出して、ボツ案になった名前なんです。個人的に気に入っていたので、今回、折下文香の友達として登場させました。折下文香のように、圖書本葉もいつかイラスト化してほしいなあ、と思っています。【銀平糖】

◆どうも、ラギです。今回の「ある家族の一日」は、〝日常〟をテーマにして書きました。ちょっと普通じゃない、けど本人たちにとっては普通の日常を書いてみたかったんです。…けど、設定が特殊すぎて、説明する必要がだいぶ出てしまって、作るのに苦労しました。削るのも大変だったし、日常の話って、書くの難しいんですね…。いや、書いたことがない系統の話だったからかな…？【ラギ】

せせらぎ　第190号
2026年2月1日　発行
編集・発行・印刷・製本
群馬県立太田女子高等学校文芸部
〒373-8511 群馬県太田市八幡町16-7
群馬県立太田女子高等学校
部員　大南怜央　長山穂乃花
石原真奈美　藤崎沙彩花
牛久綾乃　永井澪　松澤咲良
顧問　吉田俊宏　早川由子
表紙　松澤咲良